

# 睦月型えっち合同誌

R-18



小さくてもオトナだよ？

めぞ・知

よよよお？  
司令官がなんか  
食べてるぴよん！

うーちゃんも  
一口もらうぴよん♪

むに  
むに

ひやにひゆる  
ひよんうし!!

むに  
むに

うひよあまい  
まま!?!

なにやってるのー!?

おまじない



は...

しれいかあくん！  
聞いたびよん！

睦月型みんなに  
手を出しちやったん  
だつてえ...？

そんなケタモノ  
しれいかんには...

おしおきびよこっ！

319=400

!?

漫画800巻

な...ないい...

わーもう墮ちてるびよこ！！

きつ...気持ちよくなんか...

弥生もしれいかんを  
懲らしめるびよん！

...

おしおきびよこ

ってそんなに救しく  
ペろペろされたら...

うーちゃんも...

飲んじやダメえええ!!

おっぱいおっぱい

じゅわん

じゅわん

いっ...

いっくっ...

これくらいでカンベン  
してやるびよ...

あーっ!!  
逃げたびよんっ!!

おわり







真面目な性格なので  
 たどたどしくも自分から  
 奉仕する三日月ちゃん。  
 丁寧に献身的な愛撫に  
 焦らされているような快感が生まれる。

提督と三日月ちゃんの夜の営み。  
 いつまで経っても初夜のように恥じらう。



喉の奥に射精される三日月ちゃん。  
 射精中の敏感ペニスを  
 舌と喉で丁寧に尽くしてくれる。



三日月ちゃんの小さなお口では  
 全部受け止めきれずこぼしてしまう。

こぼれた精液を丁寧に舐め取り  
 匂いと味に恍惚の表情を浮かべる。



恥じらいながらも

自分から広げて提督を受け入れる三日月ちゃん。

羞恥で声を押し殺すものの、  
何度も繰り返し開発された膣穴は  
挿入の快楽で何度も達してしまふ。

抱き上げられる三日月ちゃん。

普段気を張っている反動からか、  
子供のように抱きついて甘えてくる。

快感に呼応するように膣肉が震え、  
司令官のペニスに絡みつく。  
導かれるように何度も  
三日月ちゃんの最奥に精を放つ。

溶け合うような安らぎの中で  
愛の言葉を囁き合う二人。

夜はまだまだ長い。







イラスト：ひまり





早稲川カワイネ





イラスト：ひなつきましろ





文月だよー

今日は  
護衛艦として  
司令官と  
お出かけなのー



わあ…

鎮守府の近くに  
こんな場所が  
あったんですねー

俺の秘密の場所だ  
誰にも言わないよ

海軍艦隊にだけー

おさぼりですかー？

えへへー

司令官との  
ひみつの場所…

わあ  
わあ

俺はこの先の  
駐屯地で  
用事済ませて  
くるから  
お前はここで  
水浴びでも  
してろ

えっ!?

◆描いた人 すか





…って  
司令官いない!!



でも…脱ぐのが  
恥ずかしいなんて  
言ったら  
駆逐艦のクセに  
変な子だって  
思われちゃう  
かな…



で…でも  
司令官の前で  
お洋服  
脱ぐなんて…



気持ち  
いいなあー

ちゅぷ  
ちゅぷ



おしっこしたく  
なっちゃった…

…



今のうちに  
急いで水浴びして  
司令官が戻る前に  
服着ちゃおう



司令官!?

文月  
戻ったぞー

うう…  
水の中で  
しちやおう…



◆おしまい





長月  
暇だよ

暇なら  
鳳翔さんのところか：  
間宮にでも  
行ってきたらどうだ？

えり  
長月と  
一緒がいーもん



おい！！

何やっ  
て



ちゃ  
ちゃ



仕方ないだろう  
秘書艦の仕事があるんだから

どうしてもと言うなら  
少し待て

だ



モリッ  
びんま

う〜：









足柄さん…  
俺…もう…

今日は…  
コンドーム  
つけなくても  
良いですよ  
♡

へ？

私整備士さんの  
赤ちゃんが  
欲しいです…♡

……って  
ことは……？

はい…♡♡  
昨日のプロポーズ  
お受け致します♡

？

漫画：しはちろ



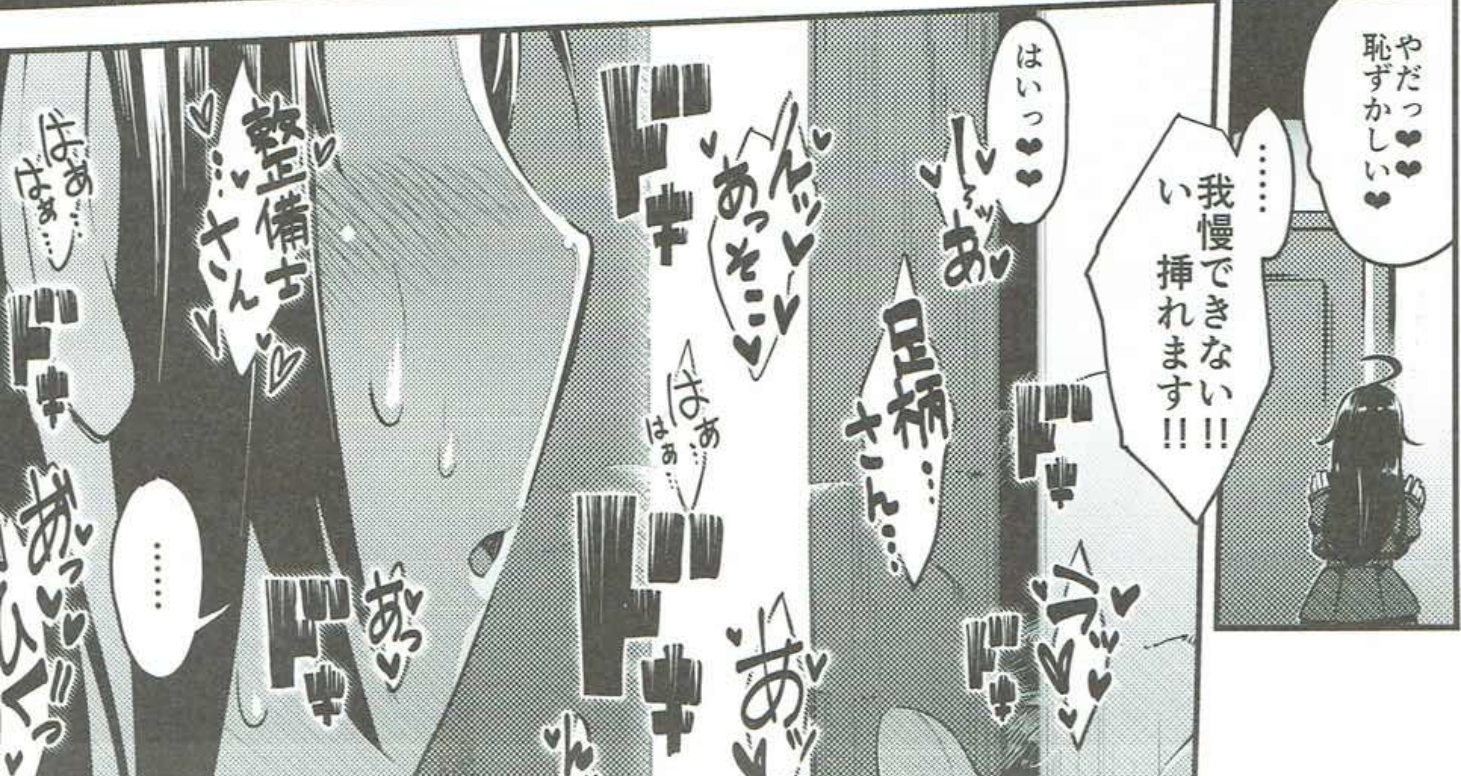
ツ！！

あっ  
おち○ぼ…  
おつきく  
なっちやく  
ましたね♡

嬉しい  
ですから…

ふふ♡

そう言う  
足柄さんも…  
おま○こ  
グチヨグチヨじや  
ないですか…ツ



やだっ♡♡  
恥ずかしい♡

……  
我慢できない！！  
挿れます！！

はいっ♡♡

あっ♡  
あっ♡  
あっ♡

整備士  
さん♡

あっ♡  
あっ♡  
あっ♡

……



って事をさっき  
廊下歩いてたら  
聞いてちやいました

覗いてみたら  
こんな感じに  
してたんです…♡

三日月ちゃん：  
ほ ホントに  
コレで赤ちゃんが  
出来るのかな？

「おち○ほ」「おま○こ」…  
そして「赤ちゃん」!!  
間違いないと思います!

ね…念願の  
赤ちゃん…

ケッコンすれば  
コウノトリさんが  
運んできて  
くれるって  
聞いてたけど…

全然運んできて  
くれないから  
どうしたのかと  
思ってたから…

こう言う  
儀式が  
必要だったん  
だね…

提督…  
何だか身体が  
熱く…♡

ぼ 僕もちよっと  
変な感じ…って  
アレ…何か…

え…?  
ん…あ あれ  
腰が…勝手に…

提督ッ!?  
だいじょ…



む…  
胸のところ

胸のところ…  
ふわって…ッ  
ふわって…ッ  
ふわって…ッ



おち○ち○  
じんじんするよ  
…!!



わっ!!  
提督!  
おち○ぼさつきより  
膨らんでます!!

頭が…痺れて…  
何…これ…ッ…



儀式…凄いな…  
何だか神聖な…  
感じが…!!

真頭…  
っが…  
…に白…  
…!!



皐月と  
ケッコンして  
しばらく…



アハハ…

あはっ♡  
司令官！ポクね！  
またおっぱいが  
大きくなってきたよ！

うーん  
そうかなあ…？

あとさ僕達…  
まだ職務中  
なんだけど…

えーっ  
休憩だよ！  
きゅーけい！

皐月がなんだか  
えつちに積極的に  
なってきました

こんなに  
恥ずかしいとこ  
見せられるのは  
司令官だけなんだよ？

むしろポクに  
感謝して  
ほしいな！

まあ確かに  
嬉しいけど…

司令官！



皐月…

ホント  
可愛いな…



ポクのこと  
ぎゅーってして♡

わわっ…



ん…?  
どうしたの  
皐月?

んっ 司令官♡  
ポクね♡  
イ・イ・こと  
思いついたっ♡



ねえ!  
司令官?

もう少しだけ…  
そのさ…ポクと  
休憩していかない?



おくち  
楽しんで…

ふあ



ん

ちゅ…



キキ

んふふー  
むむーんん♥  
(司令官さん♥)

キキ

キキ

キキ

キキ

キキ

んふふんふひひん?  
(たくしあげだよ?)

なに言ってるか  
わかんないよ  
皐月…ほら…



んんん

おくち…?  
お〇んこ  
舐めればいい?

司令官…  
もっとおくち…  
ほしいよ♥

皐月はえつちで  
せっかちさんだね

ん…違う…

んあ…だって…  
ボク…夜まで  
待てないよ…♥

皐月…ワレメがもう  
こんなニルニルに  
なってるよ

ぬる…

司令官…ポワに  
もっといっぱい…  
オトナのキスして♡



皇月…手だけで  
イっちゃおう？

やだ…♡  
ポワ…司令官の  
おちんちんで  
イきたい…♡

どうして欲しい？  
皇月言ってみて？

ポワのおなかの中…  
めちやくちやに  
してほしいよ…♡

司令官…ポワの  
お〇んこに  
おちんちん  
挿れて…♡♡

ぽわ

はー

ぽわ

ぽわ

ぽわ

ぽわ

ぽわ

ぽわ

ぽわ

ぽわ

ぽわ

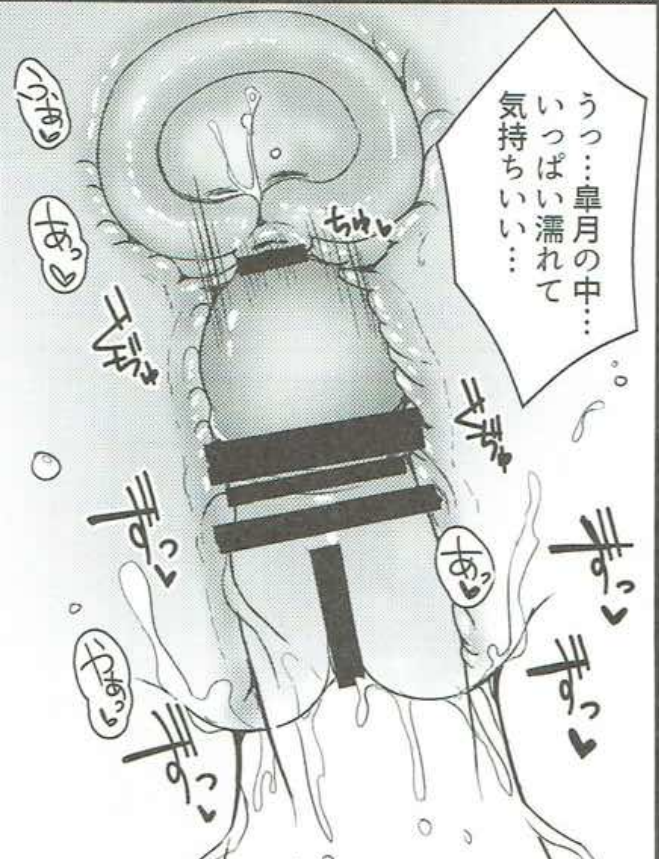
ぽわ

ぽわ



司令官：  
見えるかい？  
はやくはやく♥

あっ…♥おちんちん  
挿入ってきたあ…♥



うっ…皇月の中…  
いっぱい濡れて  
気持ちいい…





弥生は抱けて

うーちゃんは抱けないぴよん？

弥生は…  
いいよ卯月なら

なにが不満ぴよん!?

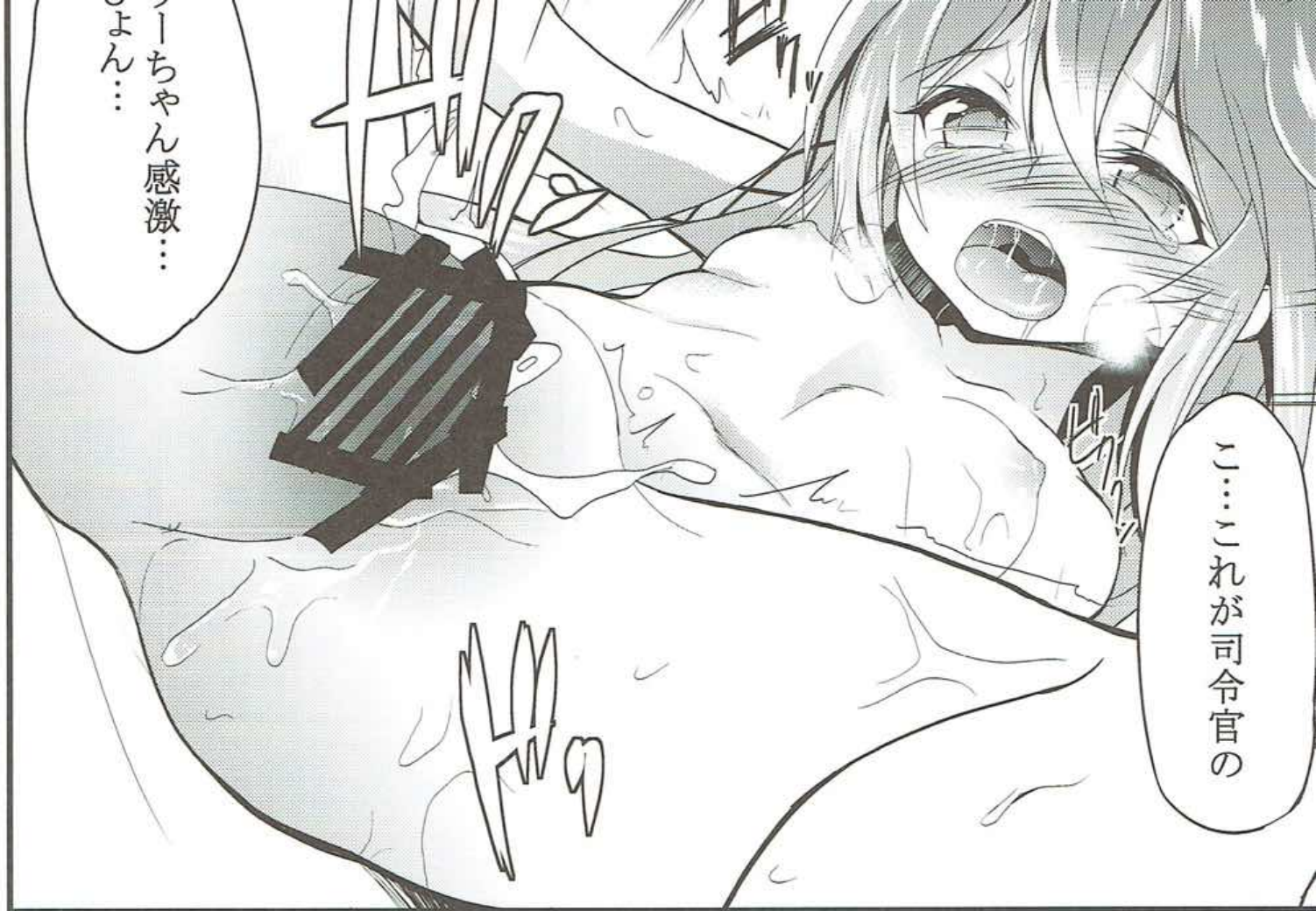
だって弥生と  
ケツコンしてるし

ええ!?

大丈夫だから…  
すぐに良くなる

し…しれいかあ…ん  
お…大きすぎるぴよん

卯月の処女まんこの  
感触ずつと覚えてて  
やるからな…



ーちゃん感激…  
よん…

こ…これが司令官の



弥生は  
慣れてきたんだから  
遠慮なく行くぞ

司令官…は  
激しいッ!



司令官私も  
愛してくれなきや

怒る…かも



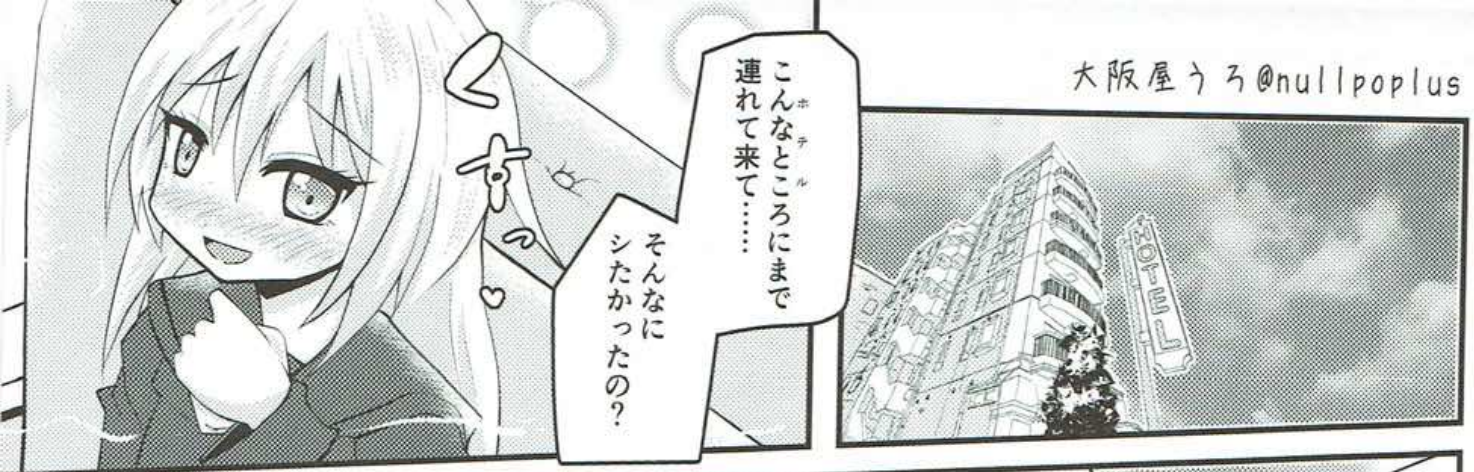
その心配は無用



今度は弥生が  
二人とも気持ちよく  
してあげたいくらい







こんなところにまで連れて来て……

そんなに  
シタかったの？



もう  
こんなに  
硬くなっ  
てる……

鎮守府だと  
コソコソするしか  
ないから

たまには  
いいか

んツ……！！  
司令官の、  
すごく大きくなってて  
口の中で暴れてる……

私の唾液と  
司令官の我慢汁とで  
ぐちゅぐちゅに  
なってる……

……え？  
私のも舐めたいって？

司令官は仕様が  
ないヒトだ……  
なツ……！！

舌が……  
這って……  
気持ちいい……ッ！

ビクッ  
ビクッ

ちゅ

ほっ



司令官の……  
腔内です……  
膨らんで……ッ!

んっ……  
もう準備  
できたから……  
挿れて?



う……んッ!  
こっ……すき♡  
こっんこっんって

おちん……ちんッ!  
ナカで……ぐりぐり  
動いて……ッ!  
気持ちイイッ♡

中出しは……  
ダメ……ッ♡  
おなかに♡  
あったかいの♡  
かけてえ♡

私のおっぱい……  
ちっちゃくて物足り  
ないかもだけど……  
全部絞り出して  
あげる……♡



もう一回勃ったら  
中出し、してもいい  
けど

どう……するっ

ガキヤ

艦隊  
帰投しました…

ポロ…

ポロポロじゃないかっ!?  
大丈夫か?

やよいが大破したから…  
進撃できなかつた…

やよい…  
装甲…薄いから…

パタ

…この装甲じゃ  
また…迷惑かけちゃう…

し…司令官…あの…

ぬま

や…やよいに…  
補強増設…してください…

もい

もい

# はじめての 補強増設

作・雨美すずめ







増設...されて...

ち...ちくちく...

はあ

はあ

ゆさ

ゆさ

ゆさ



あ

グッ

グッ



にゅぽ

あ

にゅぽ

にゅぽ

にゅぽ

ふい...?

すこし速くするぞ

やよい...もう...



もう少しだから  
頑張れ!

あ

あ

はあ

あ

あ...あ

しれい...か...

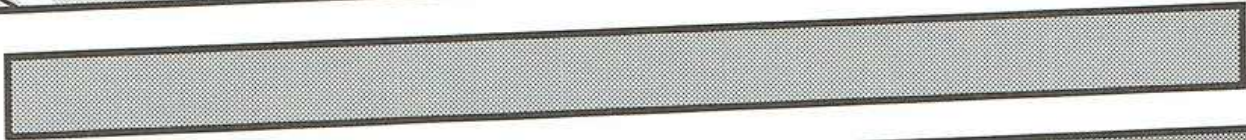
はっ

か

ど

グッ

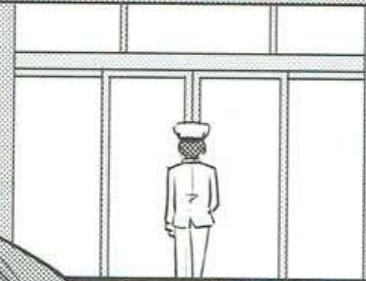
グッ



とある  
雑居ビルの一室

そこにとある  
施設がある

そう……  
この場所こそは……



描いたひとあとのまつり

睦月型風俗店である！

またきてくれたんだら

今日はお気に入りの  
文月ちゃんだ！

あっ  
しれーかん

ぽっ♡

あっ♡



ぽっ♡





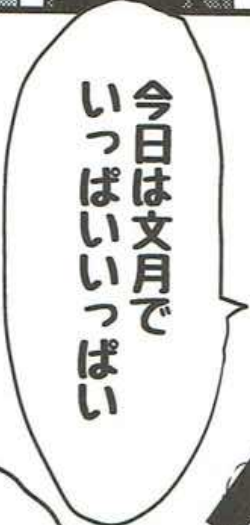
だからね…  
しれいかん



どの娘も  
すぐくえっちな艦娘なんだ！

しれいかんのにおい  
かいでたらう…

すどいどきどき  
してきちゃった



今日は文月で  
いっぱいっぱい



きもちよくなっていってね？

ホッ…

ちいさなお口で一生懸命  
ぺろぺろしてくれてる…

体温が高いのか  
触れてるところがすごい熱い…!!

ちっ

どろろ

ちゅっ

ぴゅっ…

はっ

れっ

こんなの…

はっ

はっ

んんん…

う…ああ  
気持ちよすぎる…

んん

かっ

我慢…できない!!

んん?

ズン

んっ

かっ

くっ



うっあ...  
文月ちゃん...もう少し...で

出るっ...!!

はちゅ

んんん

ぽ  
ぽ

ぽん

ん  
ぽ  
ぽ

どくん

ど

びゅん



し...しれいかん  
すごい量...っ

あっ

ぽん



ん

ぽ  
ぽ

ぽん

びゅん

びゅん

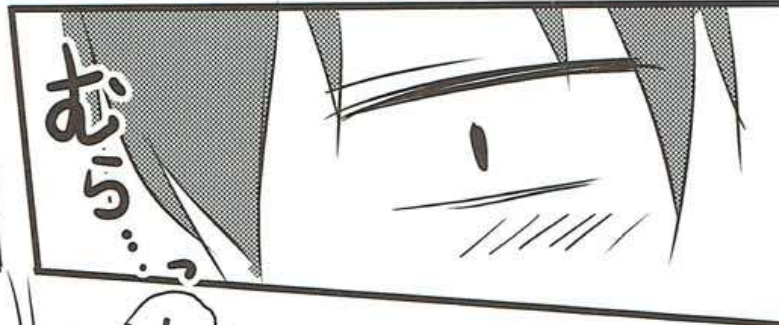


スカートにごぼれちゃった...

脱がないと...

ふは





しれいかん、待っ...





もおり、  
しれいかんがつつきすぎに

ごめん、文月ちゃんを着替えて見たら  
すごいむらむらしちゃって  
我慢できなかったんだ...

そ...そっかあ

あ

がまんできなかったなら  
しかた...

あ

よね...

ない...

びび

ぼん

ぼん

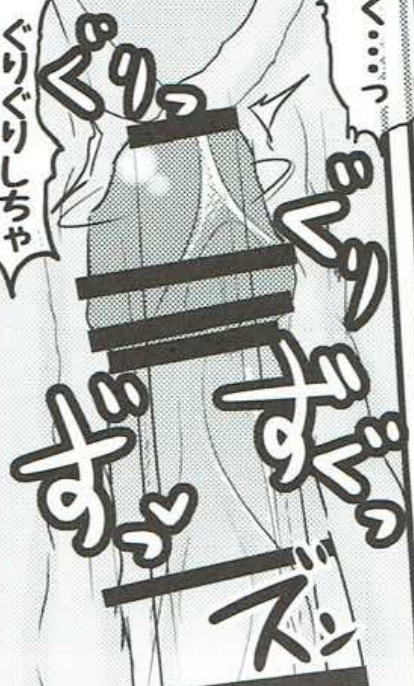
すく



あ...あ...  
あ...あ...  
あ...あ...

だめえ...  
くるっ...  
なにかん...  
...

ぐりぐりしちや  
うめえ...



ゆさ

びん

あ

あ...あ...

はっ

ゆさ

ず





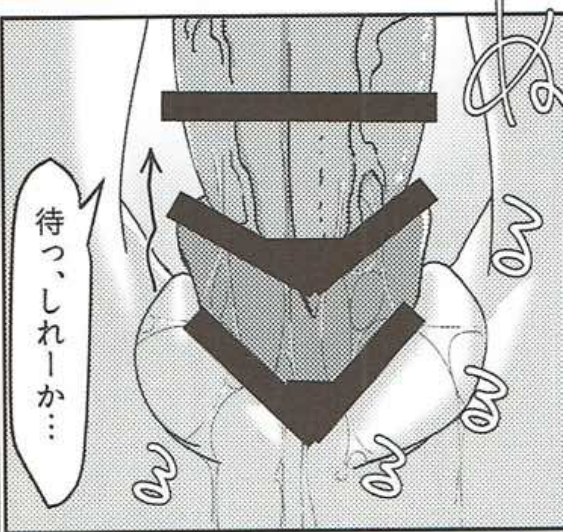
ふあああっ!!



漫画：六日

しれーかん...

ふあああっ!!



んっ





…文月

?

今回の失敗、らしくなかったけど  
もしかして…何かあった?

ん…ふあ



んーとねえ…

しれーかん分の  
補給が足りなかったかなあ?

…まだ足りない?

うーん…  
もういつかいたいたいかなーって

しようがないなあ!!

提督  
睦月に話って？

それはな  
睦月…

今日君を  
呼んだのは

とある  
儀式の為である!!

ぎしき？

そう!!  
私と睦月に  
しかできない

とても楽しい  
儀式だ!!

ううん

と言うわけで  
睦月  
早速君と【性】なる  
儀式を!!

これは君にしか  
できない事なんだ!!

ううん…

今日の提督  
いつもより  
三割増しで  
おかしいにやし…





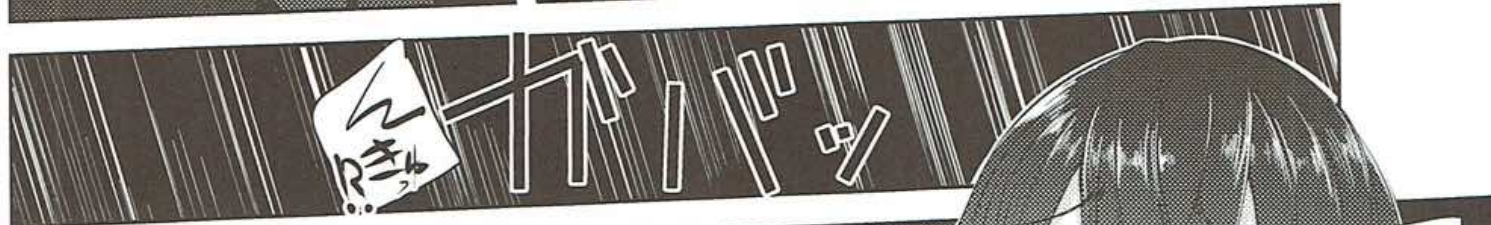
でも!!

提督が睦月を  
選んでくれたし…  
一生懸命儀式を  
がんばるにやし!!

…嬉しい

睦月…嬉しいぞ!!

はっ♡



んっ♡



うまい!!

はっ♡



んっ♡

小振りてぶにぶに  
そして希少価値…!!

あああ…  
睦月のちっぱい…♡



あう…  
ていとく…う

はっ♡

…くすぐりたい♡

はっ♡



すごい…  
君はすごい艦娘だ

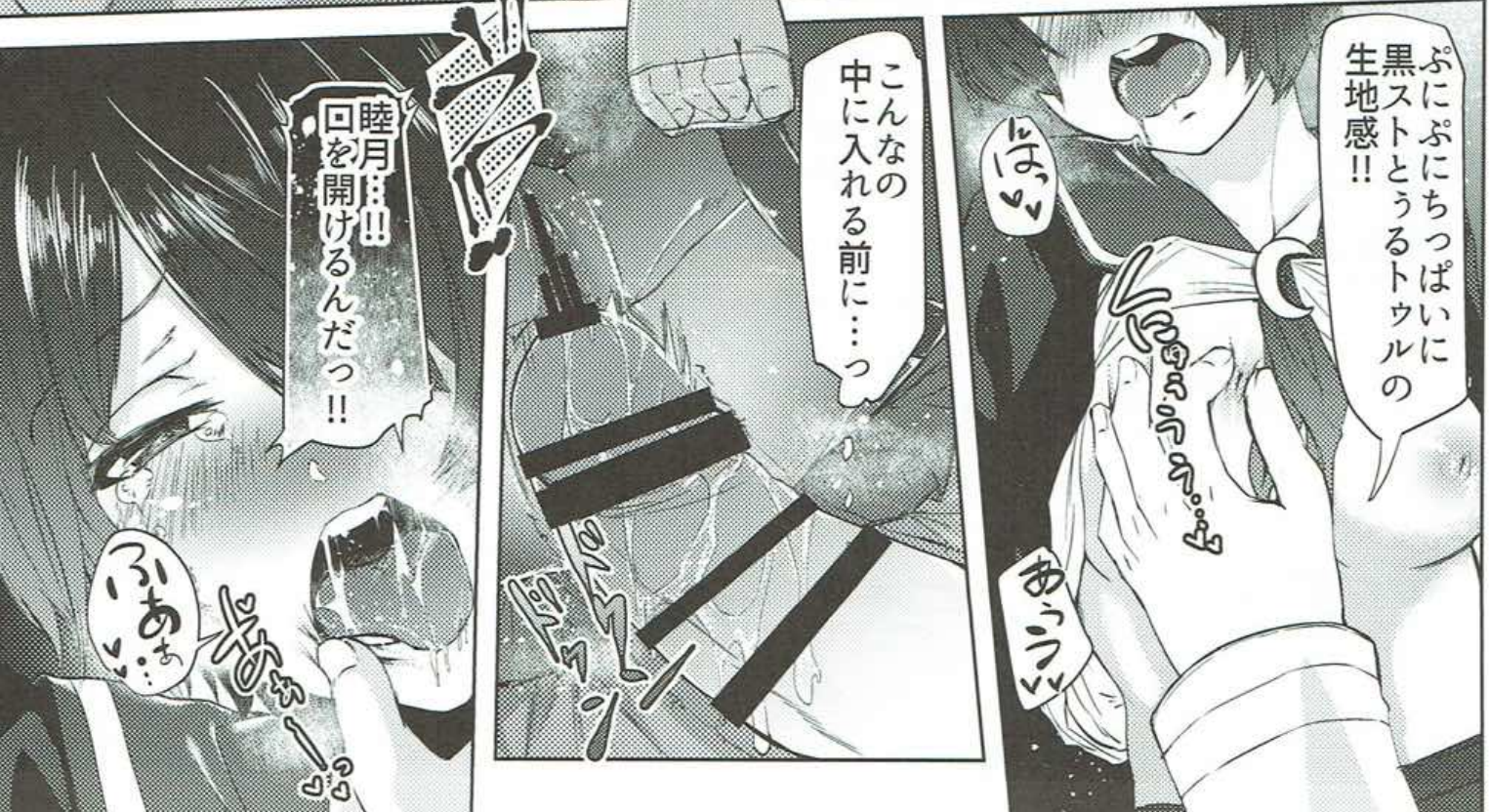
こんなにも  
私好みの艦娘が  
いるなんて…

ああああん♥  
黒ストに素股  
最高だよお睦月いい♥

て…  
提督…にや…  
にやんだかあ

変な気分いい♥

キミキミ  
キミキミ



ぷにぷにちっぱいに  
黒ストとうるトゥルの  
生地感!!

こんなの  
中に入れる前に…っ

睦月!!  
回を開けるんだっ!!

ふあああ

あーっ  
あーっ



提督…これが…  
ぎしぎし？



うあああ  
うあああ



本当はナカに出したかったのに  
私の馬鹿!!  
早漏!!しにたい!!

そうだよ  
睦月!!  
じじっは  
これは世界の  
大人のポーズ  
プロポーズ  
なんだよ!!



睦月  
コレで君は晴れて私の  
お嫁さんだよ…?

わあ…

ありがとう  
ていとく…♡



ほほら…指輪  
つけてあげるね!!

ん…?

すっ  
っ…

皐月とえっちえ、ち♡

んたにこ

わかった  
各自休憩にあたるよう通達してくれ

遠征の報告は以上だ

長月こそ疲れてるんじゃない？  
はやく休憩して来なよ

ボクは大丈夫だよ

そうか…？

了解だ…  
皐月の顔赤くないか…？

？

待ちきれないなんて  
司令官は悪い子だね……

おちんちん

いいこ♡  
いいこ♡

いいよ……♡  
えっちしょ……

わ

め



よ...で...

きれいかんの  
おちんちん...♡

んっ♡

ぐ...

ほんっ♡

がつつきすぎだよ  
司令官...あっ♡

あっ♡

ほんっ♡

ちゅっ♡

まっ

あっ♡ おくっ♡  
あたってるよお...♡

ちゅっ♡

まっ







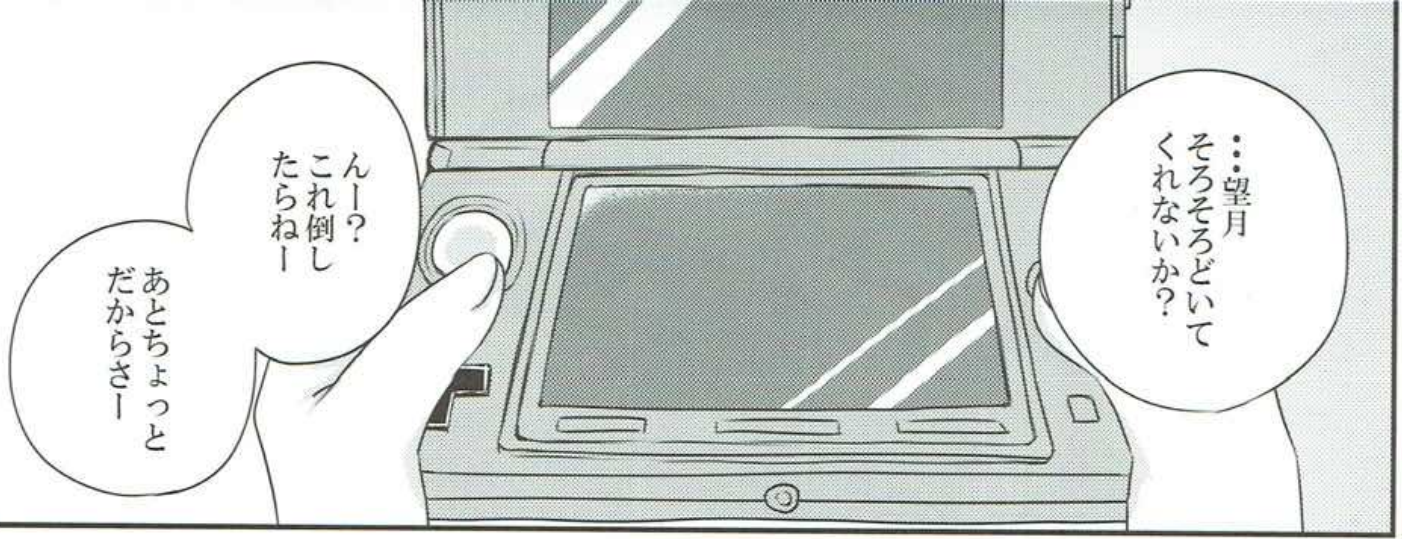


Eww!

オッ... オッ...

ちゅぽん♡

おわり



…望月  
そろそろどいて  
くれないか？

んー？  
これ倒し  
たらねー

あとちよつと  
だからさー

漫画：おちよん



望月…  
俺1時間前にも  
その話  
聞いたなあ


で

で

ん

ん！  
ん  
ん

あれー  
そうだっけー



もう日付  
変わったし  
そろそろ寝ないと  
いけないだろ

あー  
はいはい

それに俺  
そろそろ限界  
なんだよなあ…

生殺しか!!

ス  
ス  
ス…

ちよつと  
だけ…



ん?  
スリッ  
スリッ  
ちよおつと  
どい  
さわってんのさ

望月ばっかり  
楽しんでるのは  
ずるいだろ?

だから俺も  
楽しもうと  
思っ









提督う

んん

んん

んん

おっ

弥生？

提督う…

ミナミの  
ナマ…♡

ドキ  
ドキ

角オナする為に  
タイツを履かせた  
訳じゃないぞ!!

また隠れて  
角オナしてたのか!!  
悪い奴め!!

んん

んん

んん

んん





「艦娘は  
夢を見るか」

答えは  
YES  
のようだ

内容は  
人間のソレと  
大差ないが

やはり  
あの大战の夢を  
見る者も多い



特に現在も  
艦体が残る娘は  
結び付きが強いのか  
よく悪夢を見るらしい

怖い…夢を…

菊月は艦の夢を見るか

楓蛙

その孤独が

朽ちていく  
恐怖が

菊月も  
その一人だ

彼女の艦体は  
沈められた後に  
引き上げられて  
徹底調査され

今も洋上に  
放置されている

司令官…

熱を求めさせるの  
かもしれない



司令官…

もっと強く…

強く抱きしめてくれ…

あ

あああ！

あああ

あああ





司令官

バキッ  
ガッ

軽傷の娘たちを  
最優先に入渠へ

睦月が残りますッ  
如月ちゃんは  
大怪我していてッ!!



睦月ちゃん

貴方はまだ戦えるわ  
皆をよろしくね

如月ちゃんッ!!  
如月ちゃん!!

直ぐ迎えに  
行くからね!!

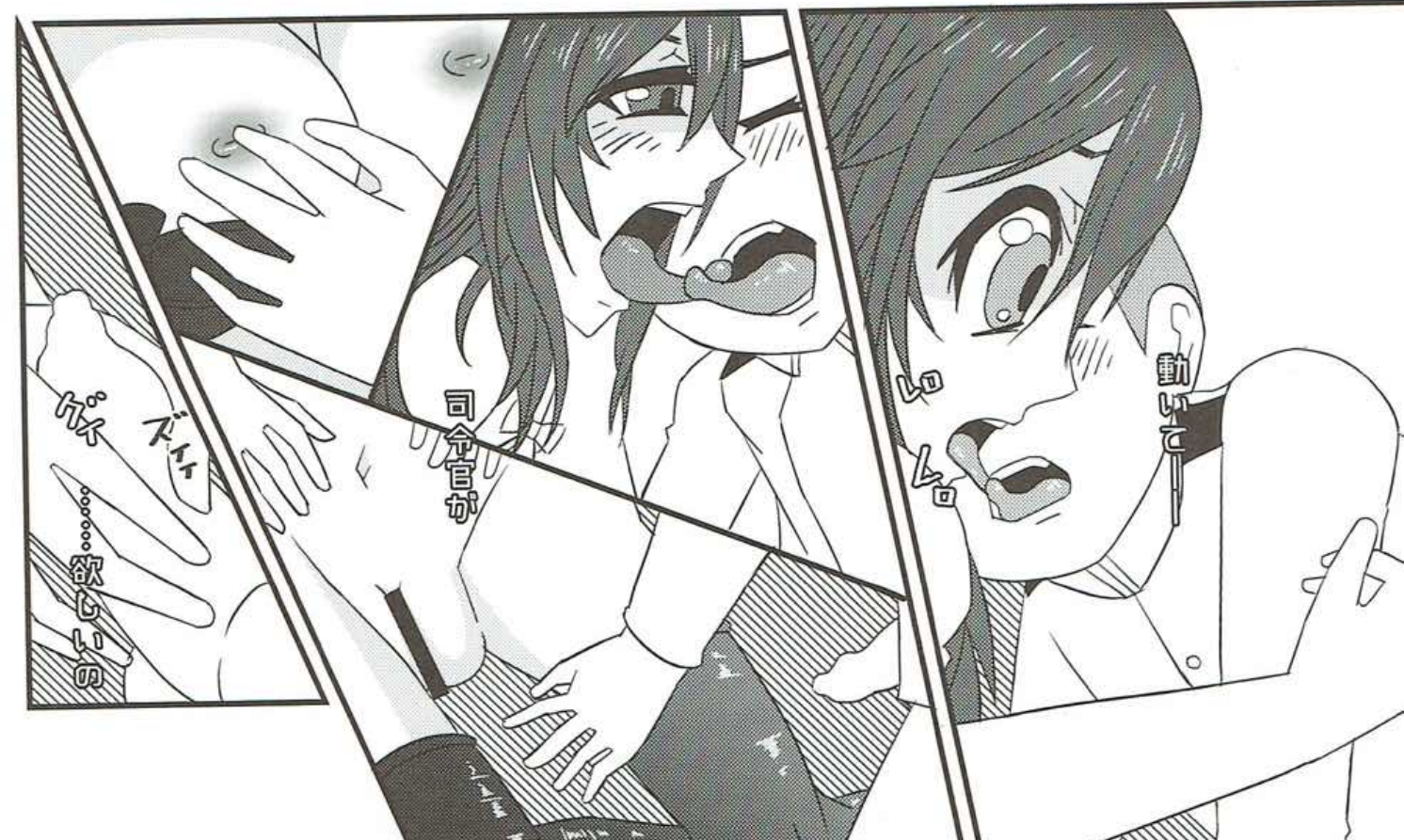


ツウ!!

如月ちゃん!!?  
大丈夫!?

僕が  
不甲斐ないせいで  
痛い思いを……

司令官……  
そんな悲しい顔をしないで……  
私は貴方の笑顔が見られれば……









# 「エエエエ」

提督が出版した  
長月研究本  
「長月のここが  
性感コマンドお」  
を手に入れたぞ!

なお長月の許可は  
得て無い模様!

長月のここが  
性感コマンドお!

何が始まるんです?  
長月エロ同人だ!!  
作・マンガをうpする人!

野郎オブ  
クラッシュャーッ!!

※野郎ぶっ殺してやる

ちよま、嘘!!?  
当たってるう?!?

ビクッ♡

おいおい  
そんな本  
信じるん...

この本によると  
長月の性感帯はあ...

ここかなあ♡

長月の弱いところ②  
「耳とくに耳孔周辺  
を攻められること♡」

長月の弱いところ③  
「フトモモの付け根を  
指でやさしく焦らす」

あああー♡♡♡

くほっ♡  
んうっ♡  
にゅっ♡



んっ♡

いっ♡

あ♡

いっ♡

ちゅっ♡...

ふふふ…  
効いてる効いてる♡

長月もしかして  
結構Mツ気ある？

すっご…  
本場所攻めると  
ドンピキするくらい  
なれちゃって…

てか提督の予測  
的確過ぎて  
ビィちやうなあw

なんか  
長月の声  
聞いてたら  
ボクも興奮して  
きちゃった…

りっ♡  
くっ♡



ちよつと  
フトモモ  
借りちやうね☆

な...なにを...  
んう?!

ふふ...  
パンツ履いてたら  
汚れちやう  
とこだったよ♡

んツ...  
長月のつ  
厚めなタイツ...  
摩擦が...直接う...  
すっごいコレ...っ!

これじゃ  
ボクもすぐ  
追いつちやう♡

スル..



それじゃあ...  
ファイニッシュ  
イッチやおうかな

気の強い女は  
「ココ」が...つて  
本に書いてあるよ

そんなコト  
言つて...

あ...  
カワイイ  
反応♡

期待してる  
くせに...

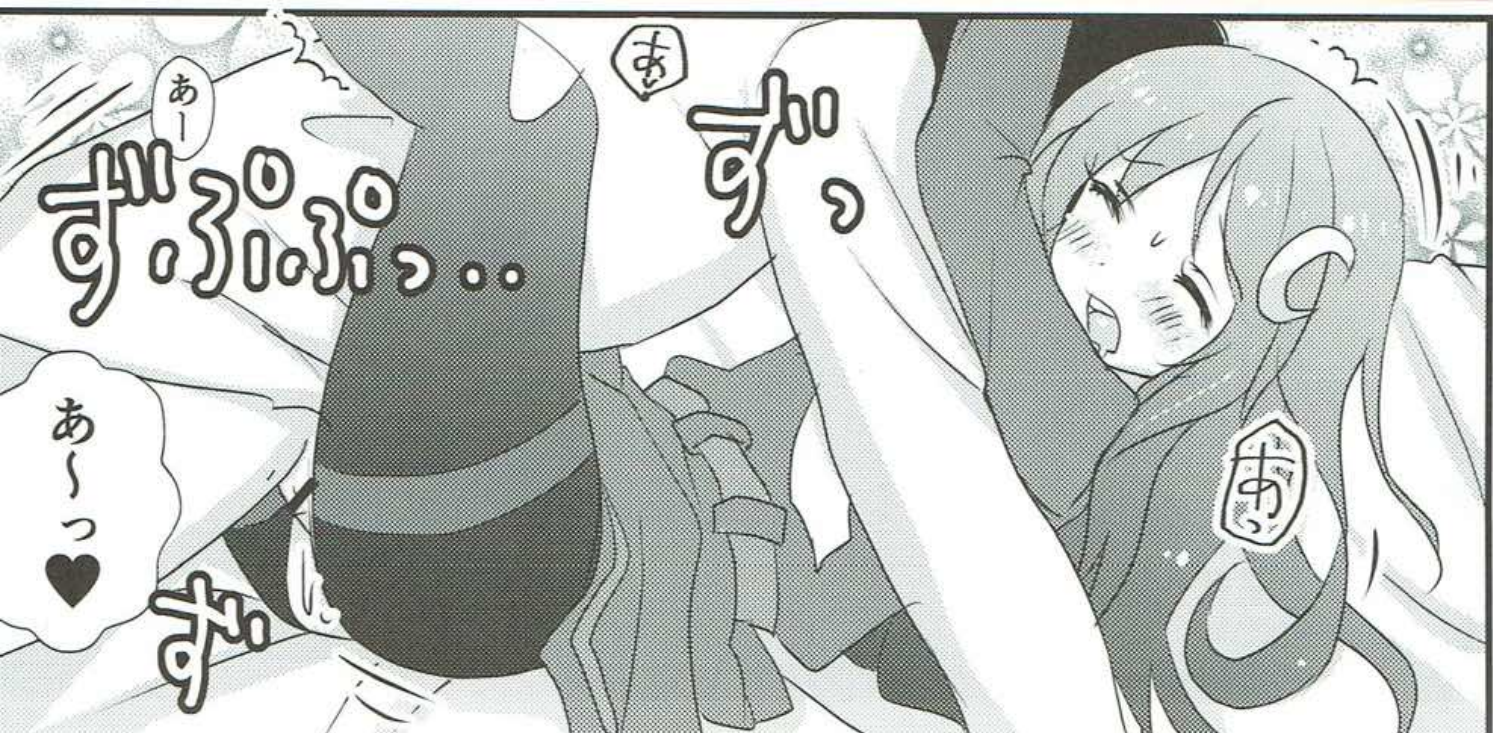
ほら

イツつちやえ



へ...  
変なトコに  
入れるん  
じゃない!







30分経過♡



10分経過



50分経過—♡♡



♡ちゅ♡

たってるよ♡

また明日へ続く♡  
♡END♡



提督…  
私は…

役に  
たっているか？

はー  
はー

洗濯日和です！

おふとんも  
干しておき  
ましょう

パタパタ...

!!

『ちょっとHな？なかよし睦月っ子』 柴犬きせつ

ズパアア...

大変です！

ぐえええ！

およっ...

すい

む

う！





どうでもいけど  
お前あたしのこと  
踏んだだよ!

今日のお昼  
ごはんも  
そうめんですよ!

ま...ま...か

今日のお昼  
ご飯も...

4日連続  
にゃし!

い...今は  
お昼ごはんの  
話をしている場合  
じゃありません!

場合にゃし!  
そうめんは  
飽きたよ!

とにかく!  
この雑誌を  
みてください!

えええ!

W O W !

皐月のおふとんの  
下からなんと...

えっちな本が!



お前の方があいつより  
年下じゃねーかよ

そっいつ  
お年頃なん  
ですかね〜♡

どれどれ〜



うっそだろー  
よりによつて  
あのバカが…？



ふ…ふくろとじが

破られて  
いるにやしい！



見てねーのかよ！  
てかお前なんでそんな  
テンション高いの？

本当かよ…  
あいつは  
ふとんの下に  
ドングリしか  
いれねーだろー！

おふとんの下に  
ある本は絶対  
えつちな本なんですよ！  
見なくてもわかります！

ちまっとふたりとも  
これを見るにやし！



見覚えがあるのです！

そして睡月は  
この本にひじょーに！





どうもこんにちわ  
先日この鎮守府に  
着任した水無月だよ

祝！睦月型えっち合同！  
ということでみなさんは  
もう抜けそうな睦月型は  
見つけられたかな？

エロ合同なのにどんな始まり方  
してんだ、と思うかもしれない  
うん…わかるよ  
でもこれには訳があるんだ

ちら！  
ナツキ相談室！  
描いた人：カイチョー



「鎮守府」っていう概念  
あるよね？いや佐世保  
とか横須賀とかじゃなくて

ジャンルとしての鎮守府  
ほのぼのの鎮守府とか  
シリアス鎮守府とかだよ

この合同なら多分、  
エロ鎮守府に分類  
されるのかな？

ドロドロねつとり  
えっちつていよね



じつは水無月、  
えっちな鎮守府に  
配属されるのが  
夢だったんだ…  
でも実際は

「ギヤゲ鎮守府」に  
配属されちゃった…  
だから周りのみんな  
テンション高すぎて  
エロのかけらもないんだ…

えへへ…

だから水無月は

革命を起こすよ！







そういう  
問題じゃ  
ないよ!

は...?  
ナス...!?

あおいおい  
あたしナス  
嫌いなんだよ  
なるならトマト  
とかにしてくれよ!



もういい...

道具に  
頼ろうとした  
水無月が  
悪かったんだ...

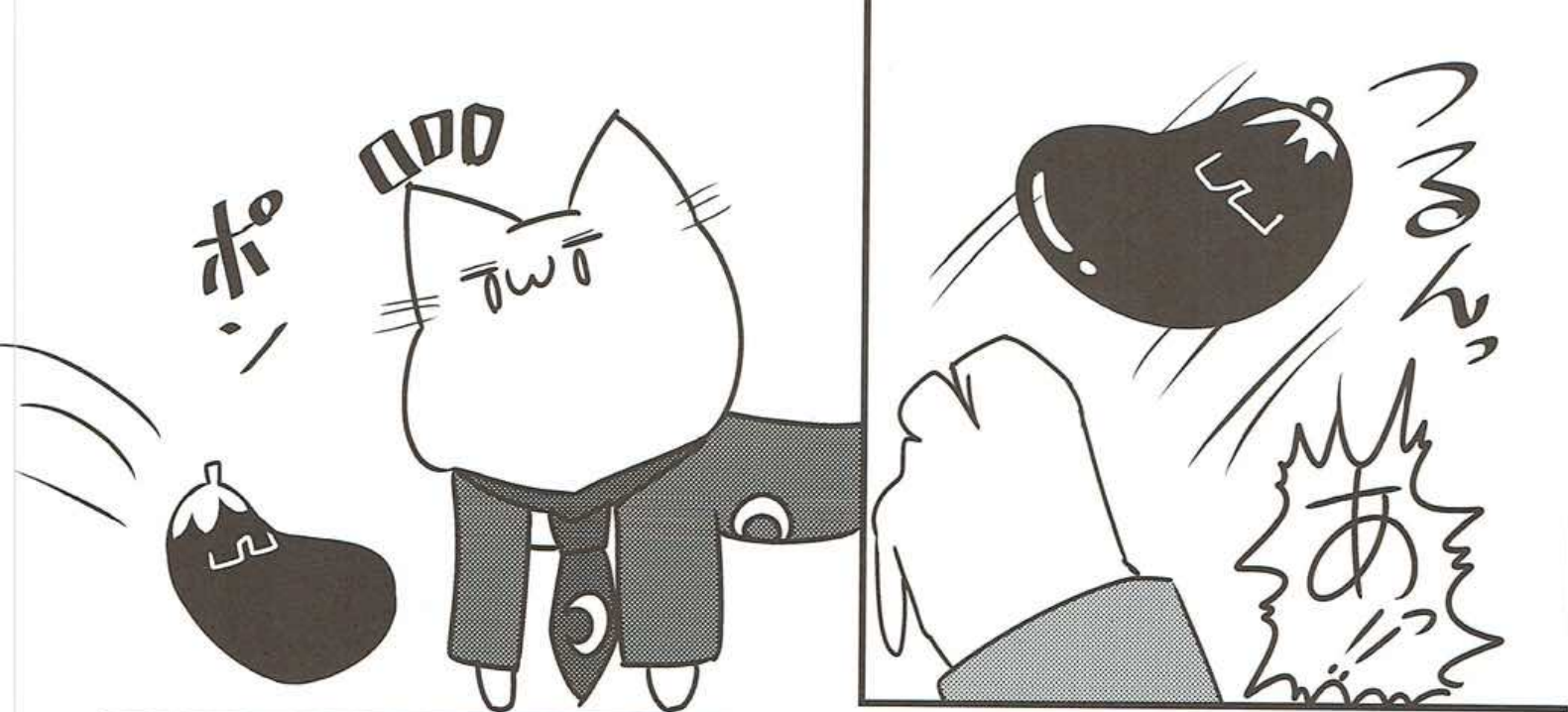
こうなったら...

いまからナスもっちーで  
オナニーしまーす♥♥♥  
もっちー♥合体しよ♥  
セックス  
エロ合同何だから  
合体くらいしないとダメだよ♥

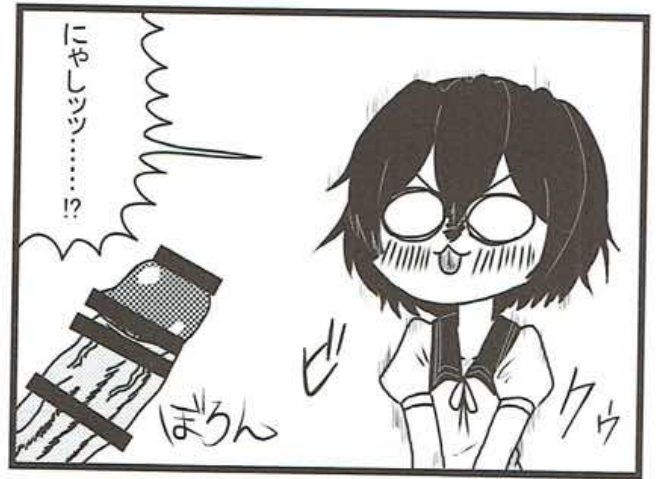
あいやめろふざけんな!  
あたしをオナニーの  
道具にすんじゃねえ!!  
ばか離せ! あたしは  
バイブじゃねえ!















うびゃ!?



しれーかん  
こんなところに  
何入れているぴよん?



びよん!!



逃げたぴよん!?

し

おしまい



2016/12.2

27

ん……し、司令官……

そんな……に……  
激し……く……

なめ……な……

く……



もうっっ。。。だめっ。。。ー

ビクッ

司令官の。。。かおっ。。。いっ。。。  
おしっ。。。こっ。。。いっ。。。  
で。。。ち。。。や。。。い。。。ま。。。す。。。っ

しやああぁあ...











AIE  
+  
F4





イラスト：寺田





# 朽畜給姫

大破着底破棄された菊月は  
敵に拿捕された。  
その後深海棲艦へと改造されるが、  
深海棲艦達が興味を無くしたのか、  
途中で再び打ち捨てられた。  
その後彼女は体を補給の為に捧げる。







店から出ると光に包まれた。灰色のビルが立ち並ぶこの街もクリスマスシーズンが到来し色を持つ。クリスマスまであと丁度一週間、日が落ちた今はより一層鮮やかな光だ。ところどころ店の前に置かれたクリスマスツリーが輝き、通りの店は全て個性豊かなイルミネーションが飾られ、葉が落ちきった街路樹でさえもイルミネーションが飾られている。どこから流れてくる『恋人のクリスマス』のオルゴールがまた雰囲気を作り上げている。

街にいる者たちは、例えばサンタクロースの恰好でクリスマスセールの手ケットを配る者、恋人と手をつないでイルミネーションと一緒にショッピングを楽しむカップル、はしゃぐ子どもと父親と母親が笑いあっている家族、いつもよりも街はより一層賑やかとなっていた。

俺もまたその街の一部となっていた。忙しかった秋の出撃が終わり、また鎮守府も周辺警戒と遠征が中心となる期間に入る。基本的には休みとなる期間が始まった、そのため提督である俺もこうして街に出ることが出来る。

しかし街に出ているのは俺だけではない。俺の隣には頭一つ分と少し程度背が低い、黒髪の女性がいた。鎮守府の頼れる秘書官、三日月だ。今日は海軍指定である黒いセーラー服ではなく、白い襟付きの赤いリブニット、ミティアム丈のベージュのフレアスカート、その上にキヤメルのダッフルコートを着ている。黒いタイツとファー付きのムートンブーツが小さな歩幅でついてきている。

せっかく張り切っておめかしただである三日月に対し、海軍服にコートという仕事上がりの自分の格好が恥ずかしく思ってしまう。自分の首には今年三日月からプレゼントされた赤いマフラーを巻いてある。三日月も同じ色をしたマフラーを巻いており、おそろいだ。

三日月と恋人の関係になって四か月が経った。今日の外出は明後日に忘年会として行われるクリスマスパーティーの買い出しのためだ。足りない人数分のお菓子の買い出しに三日月と一緒に来ていた。

俺は右手にお菓子を、左手には小さな恋人の手を握って街を歩く。久しぶりのデートで、三日月は嬉しそうに握っている手を前後に揺らし続けている。イルミネーションに彩られた街は去年よりも光量が増しているように見えた。

「今日はありがとございます、本当は私だけ行こうとしていたのに……」

「丁度やるべき事が終わっていたしな、三日月と久々に外出したかったのもあるし」

「ふふっ、ありがとございます」

三日月は俺に向けて笑顔を見た。照れているのか少し顔が赤い。買い物は終わったためこのまま鎮守府に戻ればいいのだが、せっかく街に出たのだから街を歩くことにした。

「綺麗だなあ、今年は去年以上に綺麗だ」  
「ですねえ、見ているだけで楽しいです」

三日月と談笑しながら街の通りを歩いていると、港に出た。昼は連絡船やフェリーの客とその観光客で溢れている。夜になると美しい夜景が見られるということで観光客がよくいる。実際に、冬の夜だがそれでも彩られた今だけの景色を見ようと何人かいる。

俺と三日月は港を歩きながら夜景を眺めた。灣を囲むように街が出来ているため、半円状に光の帯が出来ている。どこもクリスマススムードで、まるで港の横に天の川を横たわらせたようだ。

「わあ！すてききれい！」

「だな、とても綺麗だ」

立ち止まり、横に並んでいる三日月の腰に手を回す。手をつないでいた時よりもさらに体が接する。三日月もそっと俺の腰に手を回し、頭を肩にくっつけた。三日月の体温と甘い匂いを近くに感じる。そしてゆっくりと港の遊歩道を歩いていた。

「あー」

三日月が急に声を上げ、ある方向を指さしている。指している方を見ると、葉が落ちきったはずの街路樹の枝に、球状に葉が密集している。

「ヤドリギじゃないですか？あれ」

「詳しいな三日月、名前は聞いたことあるけど実物を見たのは初めてだ」

三日月が子どものように得意げに笑顔を見せてきた。

「如月姉さんが詳しくて、それでいろいろ教えてもらったんです！」

嬉しそうに言いながらスマホを取り出すと、ヤドリギを撮影し始めた。こうして、時々見せる三日月の子どものほいところがまた可愛らしかった。

俺はヤドリギを見てあることを思い出した。我ながらなかなか恥ずかしいことだが、この夕イミングを逃してはいけないと感じた。俺は三日月が満足し撮り終わったところを見計し、話しかけた。

「三日月」

「はい、どうしました？」

俺は三日月を抱き寄せ、腰に手を回した。幼さの残る小さな顔が近づく。漏れた吐息が顔にかかり、三日月の驚いた双眸と俺の目が合った。

「えー？きゅ、急にどうしたんですか！？」

二人だけになる錯覚を感じる。

「どういう話を知っているか？『ヤドリギの下では恋人は絶対にキスしないといけない』」

自分がこれから何されるのか分かった三日月は目を強く瞑り、口を一文字に結んだ。三日月とのキスは何度もしているが、三日月はまだ慣れてないようだである。

右手で三日月の頬をゆっくりと持ち上げた。三日月の長いまつげが小刻みに震え、顔にうっす

らと汗が見える。そういう自分も心拍数が上がり、自分の心臓の音が聴こえそうなほどだ。慣れないことはするものではない。

自分も目を閉じ、そのまま三日月の唇を重ねる。緊張で強張っていた三日月の唇は次第に解れ、唇にマシユマロを当ててくるような感触になる。

しばらく甘い時が流れた。そっと唇を離し、同時にゆっくりと目を開けた。三日月と目が合った。しばらく見つめあった後、三日月は口に手を当てながら笑った。

「ヤドリギの下でキスなんて、まるでオモチャの映画か魔法使いの映画ですね」  
「これでも結構勇気を出したんだぞ？こんなドラマみたいなことするの」  
少し怒りながらも、笑いながら言った。三日月はまた鈴を転がすように笑った。そして三日月はまた俺と目を合わせた。

「さっき言えは、さっきの言葉もありませんよ？」ヤドリギの下では女性からキスが出来る『って』  
その言いながら三日月は俺の頭の後ろに腕を回し、唇を重ねてきた。つま先立ちになっているのか、三日月が少しふらついた。俺は腕に力を込め、三日月を抱きとめた。三日月が自分に体を預ける体勢になり、これ以上ないほど体が接する。小さな体の重みといっぱいに広がる甘い香りを強く感じる。小鳥がついばむ様に唇を重ね続けた。

やがてまた体を離し、見つめ合った。そしてまた一つ考えが浮かんだ。機会を伺っていたが、渡すにはこのタイミングしか無かった。今までに感じたことのない緊張が襲ってくる。  
「三日月に渡したいものがある」  
俺はポケットから小さな黒い箱を取り出した。

「え？」  
俺は目の前の小さな恋人よりも背が低くなるように、片膝を地面についてから両手で箱の中を見せた。

「三日月……、俺と、ケツコンしてくれないか？」  
三日月はしばらく固まった後、だんだんと理解をしてきたようで、驚きで目が見開いた後、両手で顔の半分を覆った。そして体を倒すように頷いた。

「……はー」  
涙を流しながら笑っている三日月は、強くそう答えた。

鎮守府に戻ってきたのはそれからしばらく経った後だった。長い間街にいたため、帰り着いたのは夜遅い時間だった。艦娘が住む寮と自分が住んでいる宿舎と別れているためここで別れることになる。

「それでは司令官、今日はありがとうございました、もう遅いのでこれで……」  
三日月が笑顔で別れを言おうとした。

「はー」

俺は三日月にそれ以上言わせないように遮った。

「今夜、俺の部屋に来ないか？」

「えー」

三日月は声を上げた。三日月は視線を外し斜め下の地面の方に向ける。身が縮こまり右手の人差し指と親指が一番上のボタンを右に回したり左に回したり忙しい。そして俺の方をちらっと見た後、顔が隠れる程俯き、頷いた。

宿舎はマシユマロの二室のようである。リビングは広く、キッチンもあり、書斎やバスルーム等々一人暮らしには持って余りそうな作りだ。

三日月には替えの制服を持って来るよう言い、帰ってくる前に自分がシャワーを浴びた。なるべく早く出るようにしておいたが、パンツをはかずバスロープ姿でバスルームを出ると玄関にまだ靴を履いたままの状態、緊張しているのか替えの制服を胸に抱えたまま目を合わせずにもじもじしている三日月がいた。

「上がっていいぞ」

「は、はい……」

「荷物はリビングに置いていい、あと俺のバスロープが中にあるから使ってくれ」  
「わ、分かりました」

「それと……上がるときは下着をつけない方がいいと思うぞ」  
「……はー」

最後は弱弱しい返答だった。自分も三日月に行った後に、本当にするんだと、どこか夢を見ているような感覚になった。

三日月がシャワーを浴びる音が聞こえる。リビングにあるソファベッドに腰を掛け待っている。すごく長い時間のようで、早くシャワーから上がって欲しい、いやもう少し長い時間浴びてほしいという二つの心情が入り混じり、落ち着くことができなかった。

やがてシャワーの音が消え、少し経ってバスルームから三日月が出てきた。貸したバスロープは自分が着れば膝にかかる丈だが三日月には大きく、裾が床を少し擦っている。三日月のへそ下辺りに帯が着ているため胸元が開くのか、体を隠すようにバスロープの襟を両手で持ち、体を縮ませている。

三日月はバスルームから出てすぐのところまで立ち止まっており、耳元まで赤くなった顔でちらちら自分を見た後、意を決したかのように歩み寄り、俺の隣に座った。

「……」

バスルームから水滴の音が聴こえそうなほど静かで気まずい空気が流れる。とじおんていの

空気を何とかしなければ。

「えっ、三日月、どうしてですか……」

三日月は小さな体を震わせているが、少し間を置いた後口を開いた。

「せつかく勇気を出してここまで来たのに……」

目を合わせていないが、頬を膨らませながらジト目で言った。

「それは言うが、これからするところへの緊張と、三日月への愛おしさがつかり、くちくちして酔いそうだが、既に男根はこれ以上もないほどに硬くなっている。」

「じゃあ、もういいの……」

「じゃないと……困ります、もう戻ろうにも戻れませんよ……」

そつたよな、もうここまで来ているんだ、このまま戻ったら後悔しか残らないだろう。俺は意を決した。

三日月の頬をそつと触り、俺の方を向かせた。そしてガラス細工を扱うように、優しく撫でながら唇を重ねる。

「んっ……」

三日月から自分の使っているシャンプーの匂いが漂ってくる。それだけでも、胸の奥から眠っていた野性的な支配欲と独占欲が沸き起こっていくのが分かる。やがて唇が離れた時、三日月の甘い吐息が俺の顔にかかった。その瞬間に沸き起こっていたものが一気に理性の天井を突き抜けていった。

「えっ、ちゅっ……待っ……」

有無を言わずに三日月をヘッドにゆっくりと仰向きに寝かせ、そのまま覆いかぶさるようになり自分も体を倒す。少し乱暴気味に三日月の唇を奪い、その小さな体の温度と感触を体全体で感じるよう、足を絡ませ、指を絡ませ、体を擦り合わせる。

「あっ……はあ、ああ、んっ……」

時々三日月から息が漏れるが、そのたびにまたさらに性欲が強くなっていく。小さな口の中に舌を差し込んだ。

「んっ……ちゅっ……はあ……」

その中の小さな舌が、応えようと必死に絡みついてくる。春の芽吹きと共に出た雌雄の蛇のようになり、口の中で互いを求め強く絡み合った。口から息が漏れ、それが次第に荒くなっていくのが分かる。俺は右手を離し、三日月のへそ辺りを探る。すぐにバスロープの帯を見つけ、ゆっくりと解いた。

「ちゅっ、んん……あ、司令か、ん……」

口を離し、バスロープの襟に手を添えた。三日月は薄く目を開け惚けている。口元にとちとちか

のか分らないよだれがべっとりついており、二人の口をつなぐように糸を引いている。

まるで脆く壊れやすい物にまとった包みを取るようにバスロープを脱がす。言った通りに下着は付けていなく、三日月の白く細い身体が露わになった。お椀を胸に付けたような双丘はまだ未

熟で手に収まってしまつほどに小さい。桜色をした乳輪には豆のように小さな乳首がある。三日月は恥ずかしそうに胸を右手で隠した。

「えっ、すみません……、私、胸が小さくて……」

俺は三日月の頭を撫で、軽くキスをした。

「気にしなくていい、むしろ俺は好きだよ……」

「せ、もう……」

正直なことを言ったのだが、三日月は恥ずかしそうに視線を外した。

胸を隠している三日月の右手を持ち、胸から剥がし、横へ持っていく。そして右手で三日月の右胸に触れた。温かな豆腐を触っているかのように滑らかでやわらかい。その感触を確かめるようにゆっくりと胸を揉む。

「んっ……」

揉み始めると少しだけ三日月が反応した。漏れた声を聴くと少しいたずら心が芽生えた。

舌を出し、三日月のへそ近くから左胸まで、三日月の身体の凹凸を味わうように、舌を這わせよう。

「し、司令官……くすぐりたい、です……」

三日月の小さな抗議の声を聞きながら乳輪までたどり着くと、今度は乳輪に沿って円状に舌を這わす。

「はあ……はあ……」

三日月の呼吸がだんだんと荒くなっている。

今度は舌先だけで乳首を弄ぶ。出るはずのない三日月のミルクを吸い出すように口で乳輪を覆うほど吸い付き、口の中でも乳首を弄び続ける。

「あっ……んん……や、やめ……ひゃあ……」

声を漏らした三日月は、性的な興奮が高まっているのか弄っている乳首がだんだんと固くなってきていた。

「三日月……、ちゅっ、れるっ、気持ちいいか？」

「な、なんかっ、んん……ぞくぞくして……ああ……」

三日月もだんだんと性的な興奮が高まってきているようだ。口を胸から離し、三日月のバスロープを剥ぎ取る。自分が着ているバスロープと一緒にベッド近くの床へ投げ捨てた。互いに一糸まとわぬ姿となった。

そして起き上がり、股間の方に目を持っていく。腫から愛液が溢れ、すでにベッドを濡らしていた。毛の生えていない無垢な割れ目がひくひくと震えている。亀頭を小さな腫口に当く、今にも力を入れてしまえば入っていくきそうな体勢にした。

「入れるぞ、三日月」

「……ま、待って……」

「どうした？」

「えっ……その前に……キス、もう一回してください……」



よるのふたり。

萩鷺

ここしばらく、司令官と私は、恋仲の男女らしいことを、まったく言っていないほどにしている気がする。少し前に、不意にそんな思考が頭に浮かんでからというもの、どうにも気になつて仕方がない。

「どうかしたのか、そんな思い悩んでいる顔をして」  
その通り、思い悩んでいるんだ——とは言えず、「なんでもない」とだけ答えて、レーンを流れゆく寿司ネタから目についたものを取る。

休日の夕食を、一緒に過ごす。それは、恋仲の男女らしい行為と言え、そうかもしれない。私たちの歳の差に、回転寿司屋という店の選択も相まって、周囲からはよくて兄妹、下手をすると親子連れに見えているであろうことに目を瞑れば、だが。「しかし、またこんな風に気軽に寿司を食べられる時代が来る」とはね。ああやつて戦つたのも、無駄じゃなかったと思えるよ」

「案外、規模が小さいな……」  
「そりゃあ、直接生活にかかわる部分なんて、規模が小さいことがほとんどだしね」

他愛もない会話をしながら、食事をする。別に、そのことについて不満はない。恵まれすぎていると感じるくらいだ。

「食べないのか？」  
「……いや、今食べる」

しかし、私が悩んでいるのは、そういうことではない。そうではなく、恋仲になった男女がする、こう、夜の、その——  
「どうした、わさびが多すぎたか？　すごい表情だぞ？」

「へ、平気だっ！」

——ああ、もう、まったく、なにを考えているんだ、私は！  
まるで欲求不満みたいじゃないか！  
しかし、一度気にしてしまつては、どうにも頭から離れない

し、そういう行為が私たちの間で久しく行われていないのは、確かに事実なのだ。

原因はなんだろう。時間が無い、というわけではない。こつやつと一緒に外出できるくらいだ、時間的余裕はある。次に考えるとすれば、司令官が、私への興味を失なつたという可能性か。あつて欲しくはないが、ない、と断言はできない。

「……なあ、司令官」

「どうした、長月」

「その……司令官は、今も変わらず、私のことが、す、好きだろうか？」  
少々恥ずかしいが、思い切つて尋ねてみた。

「……随分と、藪から棒な質問だけど、答えは分かり切つてるだろう？　好きに決まつてるじゃないか。というか、好きでもなければ血縁でもない人間と、わざわざ同じ屋根の下で過ごす趣味はないよ」

「そう、だよな。うん。すまない、急に」

戦争が終わつて、ただの一般人に戻つた私は、司令官と一緒に暮らしている。司令官は、私の後見人ということになつてはいるけれど、だからといって一緒に過ごす義務があるわけではない。しかし、司令官は自ら同じ家で生活することを提案してくれたし、今日に至るまで追い出すような素振りを見せたことはない。なんとも思っていない相手にそんなことをしないだろうというのは、確かにその通りだ。

なにより、司令官は思い違いはよくするし、誤魔化すこともままあるけれど、嘘は言わない人だと、私はよく知っている。

そうなると、他には——

「……まさか」

「うん？」

「ああいや、独り言だ」

思わず声に出してしまうくらい、嫌な予感がした。まさか、司

令官は——成長してしまった私の身体では、興奮しないんじゃないだろうか。

「さつきから、変な長月だなあ……」

早くも五皿目に手をつける司令官を横目に、考えを巡らせる。司令官はロリコンだ、それは間違いない。よしんば本人が否定しても、当時二桁によく届いた程度だった私に手を出した時点で、言い逃れなどできない。つまり、司令官は小さな子どもに興奮するはずで、私はもうその枠から外れてしまったのではないだろうか？

実際、最後にそういう行為をしてから、一年以上は経っている。その間に、多少とはいえ背も伸びたし、僅かだが胸も膨らんだ。まだ子どもが作れる身体でこそないが、どこまでが許容範囲かはわからない。

「だとすれば、どうしたものか……」

注文したサーモンを頬張りつつ、私は思考を続けるのだった。



食事中、そして食後帰宅し今に至るまでの間、ずっと考え続けたが、他に理由は思いつかなかった。司令官はきつと、成長してしまった私の身体に興味を惹かれないのだ。

「はあ……」

非常に困った。身体の問題とあっては、私にはなんともしようがない。いくら自分自身の肉体とはいえ、そんなところまで制御することはできない。

「どうすれば、いいんだろうな……」

まだ本人の口から聞いたわけではないだし、さつきみたいに直接尋ねてみるか？ いや、いくらなんでもそれは恥ずかしくすぎるし、もし肯定されたら立ち直れる気がしない。とすると、司令官のほうをどうにかすればいいのだろうか？ 成長した身

体でも、興奮するように。

……いや、それこそどうすればいいんだ。快感で虜にする、とか？ だとしても、それにはまず行為に及ばなければどうしようもないわけで。だとすれば、無理矢理？ でも、艦娘だった時であればともかく、今は司令官のほうに力は強いはずだし——などと、私は悩んで、悩んで、悩み抜き、そうして、一つの案を捻り出した。

——寝ている間に何度も犯して、司令官の身体に刻み込んでやれば、自然と今の私の身体に興奮するんじゃないかという、側から見れば馬鹿馬鹿しさすら感じる案を。

しかし、私は本気だ。当日の夜、早速実行に移すべく、消灯後に狸寝入りを決め、隣の司令官が寝静まるのをじっと待ち続けた。そうして、体感で数十分は経ったかというあたりで、寝息が耳に入る。行動開始だ。

私は布団から這い出して、すぐ隣の司令官にかかった掛け布団をゆっくり剥がす。司令官は、下着姿でぐっすり眠っていた。薄着なのは好都合だ。まずは自分自身のズボンとパンツを脱ぎ、それから司令官のパンツに手をかける。司令官の眠りは深いほうだから、ちよつとやさつとでは起きないはずだが、念のための警戒をしつつ、ゆっくりと下ろしていき——そうして、司令官のモノが露わになった。当然ながら、硬さはなくそのままの行為は不可能だ。

「こうするのも……随分と、久しぶりだな」

軽く、握ってみる。勃起中とは打って変わり、柔らかく細いそれは、まともに目にもすること自体が久々だということも相まって、どことなく物足りないような印象を抱かせた。こんな程度だったか、司令官のは？

まあ、何はともあれ、勃たせないことには始まらない。握る手に少々力を入れて、上下に擦ってみる。すると、手のひらの中のモノはみるみるうちに硬さを帯びていき、限界まで怒張す

るのにそう時間はかからなかった。

「これは……その、なんとというか」

直前まで抱いていた感想と、全く別の感慨を覚える。でかくないか、これ。こんなものが、私の中に——いや、入らないはずはないんだが。一年以上は前に、入り切らないとはいえ受け入れられていたものが、今になって挿入できない道理はない。

「……んっ」

——とはいえ、準備には念を入れるべきだろう。

「んっ、んんっ、んくっ……！」

自身の秘部を、指で弄って濡らしていく。司令官を起こさないように、なるべく声を抑えつつ、陰核を弾いたり、摘んだり。

「あっ……あ、んっ、ああっ……！」

ある程度湿り気を帯びてきたところで、臆に軽く指先を挿入し、軽く回すようにほじり、快感を得ていく。

「くっ……ふう。こんな、ところだろう……！」

十分に濡れそぼったところで、手を止める。あくまでも準備運動であって、達するための行いではないのだ。そもそも、今回の目的は、司令官に快感を与えることなのだから、私一人が気持ちよくなっても全く意味がない。

「……いくぞ」

膝立ちの姿勢で司令官の身体を跨ぎ、ゆっくりと腰を落とすていく。そうして、ひとり、と秘所にモノの先端が触れ——

「——ああっ！」

瞬間、体重をかけて、一気に啞え込む。思わず、声が出してしまった。司令官は……大丈夫、起きていない。

前屈みになって、結合部を覗き込んでみる。まだまだ未成熟と言っている私の秘所だが、昔よりは深く、司令官のモノを受け入れていた。目測で、三分の二強といったところか。

「さて……動く、からな……！」

起こさないように、小声で呟く。本当なら、声にする必要な

んで、ないのだけれど。

「うっ……くっ、ああっ……！」

久々だからだろうか、感じられる刺激は昔以上だ。一瞬、本来の目的を忘れそうになってしまうほどだ。

「どう、だ……気持ち、いいか？」

返事はない。返されても困る。けれども、司令官に感じてもらえなければ、試みは失敗だ。

「ん……っ！」

肉壁と肉棒が強く擦れ、もたらされる快感に酔いそうになりつつ、腰を上下する。あまり大きく動きすぎて、私の浅い臆から抜けられないように、注意しながら。

そうして、声を押し殺すようにしながら、ひたすらに動き続ける。月明かりだけが照らす静かな部屋に、しばらくの間、淫らな水音だけが響き続けた。

「ま、まだっ……なの、か……っ？」

——しかし、司令官はなかなか達しない。今どれほどの快感を受けているかはわからないが、男性が絶頂を迎えたかどうかは、簡単にわかる。まして、こうして繋がっているならば尚更だ。一方、私はと言えば、気を抜けば今にも頭が真っ白になりそうだ。

「は、はやくっ……！」

自然と、そんな声が漏れる。時間をかけすぎて、起こさないためか。達してしまえば、さすがに声を抑えられないからか。それとも、単に私がそれを求めているからか——もう、自分でもよくわからない。

腰の動きは、ただ上下させるだけではなく、ひねるようになってみたり、ぐりぐりと押し付けてみたり、少しずつ変化している。どちらかというところ、それは快感を与えるためというよりは、得るための変化であるような気がするし、実際、いよいよ我慢の限界が近づいてきていた。



「しれ、か——っ！」

少しずつ、口から漏れる声が大きくなっていく。無意識に、腰の動きが大きく、速くなる。

「——っ！」

そんな中、膣内の司令官のモノが、小さくびくりと震えるのを感じた。

「そう、かつ……あんたも、もうっ、限界なんだな——っ！ いいぞ、一緒に——」

——そこまで口に出したところで、ついに絶頂に達する。

「ああ——っ！」

久々だからか、我慢を重ねたからか、視界が明るく弾けるような錯覚すら覚えるほどの強い快感が、意識を支配していく。そして、それとほとんど同時に、司令官のモノがびくびくと脈打ち、温いものが私の中へと注ぎ込まれていった。

「——ふう……っ、はあ……」

そうして、繋がったまま快感の波が収まるのを待ち、落ち着いてきた辺りで呼吸を整え、さてそろそろ——と、腰を持ち上げようとした時。

「……ええつと、長月？」

——すぐそばから、困ったような調子で、私を呼ぶ声がした。



「……その。どういうことなのか、説明して欲しいんだけど」「い、いや、これはだな……」

司令官が目を覚ました後、私は返事もしないままいそいそと後片付けをし、素知らぬ顔で布団に戻ろうとしたわけだが、さすがにそうは問屋がおろさなかつた。

「あ——あんたが悪いんだ！」

——だったらもう、全部ぶちまけてしまえ。

「こうして二人で過ごすようになってからというもの、私を求めてくることは一度としてなく！ もう、私の身体に興味などないんだろう！ そして、ロリコンのあんたのことだ！ 今は確かに私のことが身体がどうこうを抜きにして愛しているのだとしても、そのうち好みの女兒を見つけ、心もそちらに惹かれていくだろう！ だから私は、身体のほうで、虜に——」

怒りと気恥ずかしさとが一緒くたになった感情のままに、私は言葉をぶつけ——

「——×××」

——司令官が、×××が、私の名前を呼んだ。

「君は、いくつか勘違いをしている」

この人がそうするのは、本当に、大事な時だけだ。

「勿論、勘違いさせてしまったのは僕の責任だ。だからこそ、説明する責任もある」

「勘違い、とは……どういう」

ついさっきまでの勢いはどこへやら、私はすっかり聞く姿勢に入っていた。

「まず最初に。別に僕は、君に興味がなくなったから、そういうことをしなくなったわけじゃない」

「そう、なのか……なら、なぜだ」

「……あの頃は、お互いに明日無事かもわからない身だっただろう？ 更に言うなら、日常からは到底かけ離れた世界にいた。だから、と言っては言い訳かもしれないが、そういう行為をする

ことに、さほど躊躇いは感じなかった。けれど、今はどうだ。お互い平穩無事が保証されていて、しかも君は学生生活という

日常の象徴のような世界にいる。そんな状況で行為に及ぶのは、君にとつてあまりよくないんじゃないかと、そう思ってたね。まあ……余計な気遣いだったみたいだけど」

少々ばつが悪いように、司令官は頭をかく。

「その……なんだ。だから、君という人間そのものは当然として、身体のほうについても興味がなくなつたわけじゃない。と  
いうか、そういう言葉はせめて月のものが来るようになってか  
らか、もう少し背や胸が発育してから言うべきだと思うな」

「そう言われてしまうと全くその通りで、返す言葉もなかった。  
しかし、それならばよかった。そうか……私の勝手な空回り  
だったのか。」

「そして次に。確かに、僕の女性の好みは一般的な平均よりも  
いささか幼い。ロリコンと言われても仕方はないだろう。だが  
——君のことは、そういうのは抜きで好きなんだって、昔、言  
つたと思つただけだな？」

「確かに、そうだが……しかし」  
言われた記憶は、確かにある。けれど、いざ私が成長してし  
まつた時に、どうなるかはわからない——そういう思いは、ず  
つと抱いていた。

「……そこまで信用ないのか僕は。なら、思い出してしてくれ  
よ。僕がまだ提督だった頃、君くらいの歳頃の子は他にも沢山  
いたけれど、僕が君以外の子に手を出すことはあつたか？」

「それ、は……」  
私を知る限りは、ない。

「何よりも、だ。一度だつて、僕が君に嘘を言ったことがあつ  
たかな」

——ああ、そうだ。そうだったじゃないか。

「わ、私——すまない！」

とつさに頭を下げる。嘘は言わない人だと、よく知っている  
つもりだったのに、自分で気づかないうちに、疑つていたとは。

「いや、謝るのは僕のほうだ。疑われるようなことをしたのは  
僕だし、ちゃんと、先に話しておけばよかった」

「だとしても、私はあんな……その、わけのわからないことを」  
冷静になつて思い返せば、私の思考と行動は支離滅裂にもほ

どがある。結果的に、司令官の気遣いを台無しにしてしまった。  
「いいんだ、別に。確かに、目を覚ましたら馬乗りになられて  
いた、なんて状況はなかなか驚いたけれど……あれはあれで、  
なんというか、悪く、なかったと、いうか」

司令官は、顔を背けつつ、徐々に小さくなる声で、そんなこ  
とを言い。

「……その。どうにも、余計なお世話だつたみたいだしさ。ど  
うかな、これからはまた、そういうことも」

照れ臭そうに、頬をかきながら、そう言葉を続けた。

「……変態ロリコンめ」

「ぐっ……でも、それを言つたら、人の寝込みを襲う少女は変  
態じゃないのか？」

「それは……まあ、変態だな」

「なら、お互い様だ」

「そうだな、お互い様だ」

言いあつて、私たちは目を合わせる。瞳に映る表情は優しげ  
で、多分、私も同じような顔をしていたと思う。

「あんたがそのつもりなら、私に拒む理由はない」

「君がそのつもりなら、僕が我慢する理由もない」

その言葉を最後に、布団に潜る。私ももう眠いし、司令官だ  
つて、睡眠途中に起こされて、眠くないはずがない。

「それじゃ、おやすみ、長月」

「ああ、おやすみ——と、そうだ。一つだけ、言い忘れていた」

「うん？」

顔を横に向け、目と目を合わせる。

「私も、ずっとずっと大好きだぞ、司令官？——いひひっ」

「……はは」

私は、わざとらしく笑いかけ。

司令官は、恥ずかしげに微笑んだ。

——そんなある日の、夜の二人。

男は疲れていた。

連日連日の会議、ただ上官が威張りちらすだけで意味もない。

其の後はこの無能上司と酒を飲み、いや、酒を注がされに連れ回されて早や5時間。鎮守府に帰れば皆眠っていた。無理もない。もう深夜2時半だ。

「しれーかーん、おかえり！ どーだった？ お土産は？」

秘書艦の水無月だ。どうやら帰りを待たせてくれたらしい。残念ながら土産は買ってくる余裕もなかった。男は一言謝ると私室へと帰っていった。もう限界なのだ。

男は、布団に潜り込むとあっという間に眠りに落ちた。

翌朝、早朝5時。朝の早い艦娘はもう起き始める頃だ。

「あ、司令官まだ寝てるかも……しめしめ……」

そっと布団に忍び寄る小さな影。水無月だ。起こしに来た……はずなのだが左手にはペンを持っている。

「顔に……は、つまらないよね。うん。じゃあ……お腹に落書きしてみようか。えへ、しれーかん、まだ起きないでね……」

布団をゆっくりとめくっていく。起こさぬように。といっても男はまだまだ目覚める雰囲気はないが。

「うわっ、なにこれ……」

下腹部が盛り上がっていた。いわゆる朝勃ちというものだが、そんなものを水無月はまだ知らない。

「ちよつと……ちよつとだけだから」

ズボンを少し下ろしてみる。起こさないようにゆっくりと。好奇心はもう止められなかった。そのまま下着まで一気に下ろしてしまった。

窮屈そうな下着から解放されたそれは、力強く立ち上がった。

「す……これって、おちんちん、だよ。ええ……こんなに大きいのか？」

両手で顔を覆うようにするが、しっかりと男性器を凝視していた。性教育は受けていたし、外出時に道端に落ちていた本で少しは知識があったが実物を見たのはもちろんこれが初めてだった。

「せつかくだから……ちよつとだけ……いいよね？」

触れてみる。熱い。硬いような柔らかいような不思議な感触。握ってみると、軽くびくっと震えた気がした。

「なんかどきどきしてきたよ……起きないうちにちよつとだけいたずら、してもいいよね？」

小声でつぶやきながら少し上下に擦ってみる。以前見た本では擦ったり、口に咥えたりしていたのだ。

「これが気持ちいいのかな……ねえ司令官、気持ちいいの？ ……って、起きちゃ困るんだけどさ。えへへ……」

不思議な胸の高鳴りを感じながら、ゆっくり擦ってみたり、先端を撫でてみたり……初めて触るおもちゃを堪能していた。

「なんか先っぽから出てきたけど……これがせーし？ じゃないよね。うーん……変な味。なんでこれを口に咥えたりするんだろ。でも……」

粘液を少しだけ手にとって口に含んでみた。変な味なのに胸が高鳴っていた。フェラチオという行為もよくわかっていないのだが、本で見た行為を試みたい、その好奇心に負けた水無月は少しだけ口に含んでみた。

「ちゅっ……ちゅっ。うえ……変なの。でもなんだか、ちゅっ、じゅる……嫌いじゃ……ないかも……じゅっ」

水無月の小さなクチには入り切らないほどの大きさ。竿の半分ほどまでを口に含んでは舌で先端を舐めてみたり、上下に動いてみたり、それは眠っている彼にはたしかに快感として伝わっていた。

「じゅっ、じゅっ、じゅっ……ぶはっ、なにこれ……？ 水無月までなんだか、変なの……」

気づけば履いていた短パンのジッパーを下ろし、下着越しに自分の性器をまさぐっていた。未熟ながらもたしかに愛液は溢れ出し、下着を濡らしていたのだ。

「なんだか、きもちいいかも……もうちょっとだけ続けてもいい……よね？……司令官、起きないでよね」

短パンと下着を脱ぎ捨て、ワレメをいじりながらふたたびフェラチオを開始した。上のクチと下の口から水音が聞こえ始めているが、疲労して眠りについた男が起きる気配は未だにない。

「じゅぽっ、じゅぽっ……じゅるっ……ちゅっ。ぶはっ。なんかすごいよこれでも……これ、本当に水無月のここに……入るの？」

セックス自体は知っていた。が、左手でまさぐっている自分のここに、今右手が握っているこのそり立つモノが入るのだろうか。考えながらも手でしごきながら、自分の秘部をいじめることはやめられなかった。

「んっ、なんか変な感じ……なんか、こっちもびくびくしてるし……ちゅっ、じゅるっ……じゅぽっ、ぐぽっ……」

ふたたびクチに含んでみた。すでに射精寸前なのだが、本人は眠っており、愛撫している水無月も経験がないためそれには気づけなかった。

「じゅっ、じゅるっ……じゅっ、んっ、んんんっ！」

一度大きく震えたかと思うと、一気に何かが口の中に溢れ出してきた。今離したら布団まで汚れてしまうと考えると無理にでも口を離せなかった。

大きく射精した後、二度三度と生殖器が震え、残った精液を吐き出した。

「けほっ……けほっ……なんだよお……これえ……うええ……これが、せーし？」  
手元のティッシュを取り、口の中の精液を吐き出す。白い粘着く液体。愛撫により相手を絶頂させたたしかな証だった。……男はまだ起きる様子はない。射精の瞬間こそ顔をしかめるような表情になったものの、疲労もあり未だ覚醒にはいたらないようだ。

「あっ……ごめんよ、綺麗にするから……」

ティッシュを取り出し、竿周辺を拭いていく。のだが、また胸が高鳴ってきていた。

これを入れたらどうなるんだろうか。起きてしまったら怒られないだろうか。

司令官の赤ちゃんができたらどうしよう

頭の中で考えていくが、何より勝るのは好奇心だった。もっとも、彼女はまだ孕むことはないのだが。

「司令官……ね、入れていいよね？……返事ないから、入れちゃいまーす……」

男に跨り、自らの秘部を広げ、先ほどまで啜っていたものをあてがってみる。先端から少しづつ入っていく。先ほどまでの自慰行為でしつかりと濡れていたが、それでも大きさが違いすぎた。

「痛……なんだよもう……これ、本当に気持ちよくなるの？」

目尻に涙を浮かべながら時間をかけてゆっくり入れていく。自分の中が広がられていき、痛みを覚えながらも飲み込んでいった。

「っ……キツいなあ……これ……うっ、んん……あ、奥……届いた……」

全てを飲み込むことはできなかったが、ついに膣の最奥まで飲み込んだのだ。竿を伝って破瓜の血が垂れているのだがそれに気付ける者はいなかった。男は未だに目覚める気配はない。

「えへへ……司令官と、えっち、しちゃった……ね、動くよ？」

眠ったままの相手に話しかけてみる。この状態で起きられても中断できないだろうが。

「じゃあ……動くよ？ んっ、んっ……」

ゆっくりと上下運動を始める。まだ痛むが、お腹の中で硬いものが動いている感触。一番奥をこっつ、こっつとつつかれる感触。何よりも相手を征服しているという状態が水無月を興奮させたいた。

「なんか、こういうの、んっ、いい、よね？ほら……司令官、今、んっ、水無月に犯されてるんだよ……今起きたら、んっ、どういう顔するんだろうね？」

起きる気配のない男に話しかける。心なしか苦しそうな表情を見せ、それがまた水無月を興奮させていた。

「んっ、んっ、ね、こういうのどう？」

上下運動だけでなく、左右に揺すってみたり、前後に動いてみたり……だんだん楽しくなってきたのか、動き方を変えることで表情が変わることが楽しくなっていた。

「あっ……今びくってした。んっ、まだダメだよ。司令官。」

一度腰の動きを止め、見下してみる。もともと遊ぶことやいたずらも好きな水無月だったが、もはや男は水無月にとつてのオモチヤと化していた。

「落ち着いた？　じゃあ、再開しようか。んしょ……んっ、んっ、あっ、なんだか、んっ、水無月も気持ちよくなってきた……かも。んっ」

愛液も増え、動くたびに卑猥な音が聞こえ始めていた。

「ねっ、んっ、ほら、水無月のここ、んっ、気持ちいい？　気持ちいいよね？　中に出しても……いいよ？」

性器がびくびくと震えだしたことから察したのか、動きを速めて一気に精液を搾りだそうとする。

「ほら！んっ、ねっ？　んっ、んっ、我慢しないで、いいっ、から！」

水無月が腰を一气に落としたその瞬間、精液が吐き出された。

「ああっ……んっ……出て、あっ……これ、気持ちいい……」

「しれーかーん！　起きてー！　朝だよー！」

朝7時、いつもより少し遅い時間に秘書艦の水無月が起こしに来た。

「昨日遅かったから遅めに来たんだけど……大丈夫？　よく眠れた？」

いつもどおり優しく気を遣ってくれる子がそこにいた。熟睡できたと、そう伝えると水無月はいつものようににはかんだ。

「えへへ……そう？　ならよかった。うん、朝ごはん作るから顔洗っておいでよー！」

二人で朝食を取り、スケジュールを確認する。今日もまた会議、おそらく同じ時間になるだろう。朝から憂鬱で仕方ない。

「遅くなるの？　うーん……今日はお土産、お願いね？」

忘れたらまた、いたずらしちゃうから。小声で呟いた声は男には聞こえなかった。

君の声を聞かせて

ふらふらっく

時刻は日付が変わり、少し経った頃。部の艦娘はまだ酒盛りをしていたり夜戦と賑やかにして、彼女らのいると思しき部屋には、まだ明かりが灯っている。

そんな明かりのついてる中のある室。艦娘寮とは少し離れており、いくつも連なつた窓に明かりが灯っている。そこは言わずと知れた鎮守府の中核、執務室だ。遠征や出撃の報告、書類の処理など様々なことがこの部屋で行われているが、この時間においては任務とは関係のない、別のことが行われているようとしていた。

「……なー司令官」

「なんだ、望月」

「ゲームの邪魔なんだけど」

雑務を片付けいつものごとくソファでゲームをしていた望月の右隣にどつかりと座ると、左手で彼女の髪をサラサラと梳くと、そう望月が小さく声をあげた。

「いいじゃないか。仕事で疲れた俺を労ってくれよ」

そう言いながら俺は髪を撫でていた手の人差し指を伸ばし、望月の頬をつつく。

「相変わらず望月はもちもちだなあ」

「だから、ゲームの邪魔だつて言つて——」

そこまで言うと、彼女は急に黙り込む。と、ゲームから目を離し、俺の方をジト目で見つめてきた。

「……司令官、右手」

その理由はすぐにはわかる。ついている左手とは逆の右手で望月の胸をセーラー服の上からだが揉んでいたからだ。

「ほら、最近ご無沙汰だったろう？ だから望月のこも変わりばえなくもちもちしてるか確かめなければと思つてな」

「んっ……司令官、オヤジ臭いぞー」

そう言われつつも右手を止めるとは言われない。こちらから仕掛けるときはこうして軽くボディタッチで反応を伺う。拒否されないというところは、オツケーのサインだ。……まあ、嫌がつてもやるるときややるんだけどな。

「……望月」

「……ん」

望月に呼びかけながら、左手を顎の下へと持つていく。すると彼女は小さく息を吐くと、ゲーム機を閉じて対面に置いてあるローテーブルに置く。それを見計らつて俺は望月の顔をこちらに向けさせると、ゆつくりと押し倒しながら唇を塞ぐ。

「んむ……ちゅう……んっ……」

そのまま舌を絡ませて、彼女の口の中をかき回していく。最初の慣れないうちは俺のなすがままにされていたが、幾度となく行為を重ねていくうちに、彼女からも積極的に舌を絡ませて、俺に合わせてくれるようになってきてくれた。

「ふあ……んっ……ちゅう……」

もちろん、ただ俺はディーブキスをしていたわけじゃない。胸を触つていた手でゆつくりと望月のセーラー服をたくし上げて、彼女の胸にある蕾に触らぬよう優しく丁寧に触つていく。

「ふはっ……」

と、こで望月の息に限界がきたようで彼女は俺から顔を離すと、肩で息をしながら蕩けた目で明後日の方向に顔を向け、放心している。

「上脱がすぞ」

「ん……」

聞こえてるのはわからないが、ここから先には余計なものだ。俺はセーラー服の横のチャックを上げ、望月の両腕をあげると彼女からセーラー服を取り去る。するとそこには、触れてくれと言わんばかりに双丘の頂点に鮮やかな桜色をした蕾が二つ、ツンと勃つていた。

そして俺は今度は両手で彼女の胸を弄り始める。だが当然彼女の蕾には触れない。その周りを指でなぞったり、揉んだりしていく。

「んっ、しれーかん……あんま焦らさないでよ……っ」

「まだまだ、そうがっくんじゃない」

ぴくりと身体を震わせて、望月は俺に言う。だが、彼女の欲望には従わず、俺は今のものかい攻めを続ける。

「ふっ……んんっ……しれえかん……っ」

「……………」

幾度となく小刻みに身体を痙攣させ、ずがるような目と声で俺を揺さぶってくる望月。彼女の懇願するようなその表情だけでも理性が飛びかけ、今すぐ彼女にむしゃぶりつきたい欲望に駆られるが、ぐっと心を鎮め生殺しの愛撫を続けていく。

俺がなぜここまで彼女を責め立てるのか。その理由は、先ほどの口づけにも、このもどかしい焦らしにも表れている。俺たちは少なくとも、手で数えられないほどに身体を重ねてきた。が、初めて彼女と事に及んだ時から、俺は不満——というと語弊があるのだが、疑問に思っている事があった。

彼女が声を出してくれないのだ。最初から今に至るまで、彼女のそんな声を聞いた覚えがない。最初のうちはまだ、こういう事に慣れてないのだから仕方がない、俺のやり方が悪いのだからとも思っていた。が、回数を重ねるごとに彼女はむしろ声を我慢し、呼吸を荒げてさえ声を我慢しているという事に気づいたのだ。何故彼女はそうまでして、頑なに声を出そうとしないのか。そこで俺は彼女が本音を「ぼしやすい寝起きを狙って、その真意を直接問うてみたのだ。今考えれば我ながら大胆な事をしでかしたと思うが、俺は運良く彼女の真意を知る事ができた。彼女曰く、

『大きな声出すの面倒くさいし、なんつーかその……恥ずかしいんだよ』

ということらしいのだ。そんな理由で、と思うのはまあ俺が乙女心がわからないというのもあるだろうが……。とにかく、そんな話を聞いてしまった俺に当然と言つてもいい考えが浮かんだのだ。

彼女に声を出させたい、声が聞きたいと。

「はーっ……はーっ……」

焦らしに焦らされ、もはや息を荒げて身体を痙攣させるだけの望月。全身は汗でじっとり濡れ、双丘の頂点は赤く尖って刺激を今か今かと待ちわびている。ちらりと彼女の足を見やれば、彼女から湧き出た愛液がスカートはおろかソファのあたりまでをも染め上げていた。

そろそろ頃合いだろう。そう思った俺は右手を彼女の胸から離すと、制服のポケットへと入れ、中身をまさぐる。そして俺がポケットから取り出し

たのは、ピンク色の卵形をした物体で、片方の先端からコードが伸びたものだ。それは俗にローターと呼ばれる代物。工場の開発妖精さんに極秘に揮発してもらったものだ。妖精さんから受け取る時に、サムズアップされたので性能はいまでもないだろう。俺はそれを左手に持つと彼女の震える頂点に優しく押し当てた。

「んあ……」

昂った身体にはローターのひやりとした感触も十分な刺激になるようで、押し当てた瞬間、望月は少し大きく身体を身じろぎさせる。

「焦らせて悪かつたな望月。今、楽にしてやる」  
「え……っ」

俺の言葉に望月の気が緩んだその瞬間、俺はためらいなくポケットの中のスライドスイッチを、可能な限り真上と動かした。そしてそれはすぐに、彼女の先端に当たっている本体に強力な振動となつて襲いかかる。

「っ……？ ああああああああああ……っ……」

持っている俺の指ですら、下手をすると落としてしまいそうな振動だ。それを限界まで焦らされた性感帯に直撃させられたのだ。彼女はガクガクと大きく身体を震わせて、もはや悲鳴に近い嬌声を部屋に響き渡らせる。

「まっ、あうっ、それとめつてえっしれっ……んあっ……」

左右の乳首にローターを交互に当てながら、もう片方の空いている方には指先でゴロゴロと先端を動かして刺激を与える。位置を切り替えるたび、彼女の善がり声が俺の耳を甘く溶かしていく。

「ほら、いいの望月。可愛い声が丸聞こえだぞっ」  
「っ……んあ……ふあっ、んくうっ、あっ……」

きつと俺の顔には、さぞ悪い笑顔が浮かんでいるのだろう。俺がそう言うのと、望月は震える両手で口を押さえ必死に嬌声を抑える。が、手が震えているのもあるだろうが、溜め込んだ快樂欲求がそれを許しはしないのだろう。声を押し殺し切ることができずに、幾度となく甘い声が彼女の口から漏れ出す。

「し、れい……あつ、も、ダメ……っ！ イっちゃ、イっちゃうからあ……っ」

と、絶頂を迎えるのも堪えているのか、目を固くつむり声までも震わせて懇願する望月。そろそろ頃合いだろう。そう思った俺は彼女に呼びかける。

「そうか……。——今、イかせてやるからな。」

刹那、俺は遊ばせていた左手で彼女の左胸の突起をつまむと、くい、とつまみを回すように軽くねじりあげた。

「つあーっ…… あああああああああああああつっ……」

そして今日一番の嬌声を上げながら、望月は身体を大きく弓なりにしならせる。深い深い絶頂を迎えたよう上下に激しく身体を痙攣させ、股からは今まで見た事もないほど多量の蜜を吐き出している。

「あ……あ……」

時間にすれば数十秒ほどだっただろうか。激しい痙攣は落ち着き、望月はドサリとその身体をソファに投げ打つ。が彼女は今も時折、ピクリと身体を震わせ、うわごとのように口から声を漏らしている。

そして、恐らく何か変なスイッチが入っていたのだろう俺も、その彼女の惨状を見て少し頭が冷えた。

「……やりすぎたっ！ 望月、大丈夫かー？」

そして俺は慌てて望月に声をかけ、頬を軽く叩いたりを身体を揺すったりして彼女を呼び戻す。

「んっ……大丈夫だから、あんまゆすんないっで……」

俺が数秒ほどそうしていると、望月は若干声をうわずらせ、そう言つて身体を起す。さっきの攻めがまだ尾を引いているのだろう。

「すまない、望月。俺の身勝手に万般的な行動で望月を苦しめてしまった……」  
「別に、いいよ……。あたしが声出さないせいで、司令官が嬉しくなさそうなの……薄々わかつてたかんね。あたしだって、絶対に出したくないって思ってるわけじゃねーし。でもやっぱりさ、その……恥ずいじゃん？ だからさ、ちょっと強引だったけど、声を出させてくれたことは特に気にしてないんだよねえ」

望月がそう言つてくれて、俺は少し気が楽になった。が、「これは」ということは他に何か気に障ったことがあるのだろうか。

「あたしが嫌だったのはさ、それでイカされたことなんだよねえ」

そう言つて彼女が指さすのは、俺が未だに手に持っているローターだった。「せつかく二人でこういうことしてるんだからさ……。……そのさ。イ、イク時は、司令官のでいきたいんだよ……」

そして彼女は照れ隠しか目線をそらして俺に手を伸ばし、触れてそう言ってくる。そしてその言葉と望月の仕草は俺にとつて最大の赦しであると共に——最高の起爆剤だった。

「司令官、それ……」

「す、すまない」

自覚はしていたが、望月に指されそちらを見ると、俺のモノがズボンを持ち上げてテントを張っている。

「相変わらずわかりやすいねえ、司令官はさ」

「ぐ……」

ぐうの音も出ない。きつと今俺は苦虫を噛み潰したようなひどい顔をしているのだろうか。それを裏付けるように、望月は苦笑して言う。

「……いいよ。司令官の好きになつて」

「だが……」

正直な話、今望月を抱いてしまえばさっきと同じように自分が暴走して望月にまた辛い思いをさせてしまうのではないだろうか。

「あのさ……。さっきさんざんやられたのに、まだ身体、火照ったまんまなんだよねえ」

俺がそう考えて押し黙っていると、そう言つて彼女が少し身動きする。すると、クチリと小さくスカートの中から水音がする。よく見てみると彼女の双丘の蕾は、まだはつきりとその姿を自己主張していた。

「今度は、司令官は大丈夫だつてあたしは信じてる。後さ、今こつやつて司令官と話してるけど、割ともう我慢の限界なんだよねえ……。だから今もし司令官がここで止めたとしても、あたしが司令官を襲う」

その言動に思わず彼女の目を見ると、彼女もまっすぐに俺を見返してくる。ああ、これは本気の日だ……。

「それにさ、司令官もそれじゃ苦しいだろ？ だからさ——」

そこで言葉を区切つて、望月は俺に笑いかけて言う。

「今度は司令官ので、あたしをいっばい気持ちよくして？」

望月のその言で、俺の躊躇いと幾ばくかの理性は、完全に吹き飛んだ。俺はゆつくりと彼女のスカートをめくり、もはやその役目を放棄した下着をためらうことなくスルスルと下ろしていく。





そして、溜め込んだ快樂と共に俺は俺自身の噴火のマグマを、彼女へ叩きつけた。

「つ……！ ああああああああああ……！」

その直後、望月も深い絶頂へ至ったようで、際大きく声をあげて彼女の全てがあらん限りの力で、俺から子種を得ようと物を絞り上げる。

「あつ……。あついの……。いっぱい、出てるう……！」

彼女の言葉の通り、俺の射精は止まる気配を見せず、今もまだ彼女の子宮へと子種を吐き出し続けている。

「ふう……。……。抜くぞ」

やがて数十秒ほどしてようやく射精が収まり、俺はゆっくりと肉棒を望月から引き抜いた。直後、彼女の秘裂からはまるでドロリという擬音が聞こえるほどに大量の白濁と愛液が溢れ出してくる。

「はあ……。はあ……。司令官、出し過ぎだつーの……！」

「すまん……。まさかこんなに出るとは思っていなかった……！」

普段それなりに溜まっている時に望月とやつても、ここまで量にはならなかった。それほど今回の彼女との行為は俺の身体にとつては最高の快感だったのだろう。そしてそれゆえに俺には望月への不安が残る。

「望月、その気持ちよかったか……？」

「……これで見えないんなら、あたしは司令官を明石さんのところに連れていくよ」

「……それもそうだな。それと望月、次から無理して声出さなくていいからな。お前が気持ちよくなれて初めて——」

「あのさ、司令官」

彼女の本音が聞けてとりあえずほつとすることができた。が、俺がそこまでいったところで、急に望月に話を遮られる。

「今まであんまり声出さなくて、すごく恥ずかしかったんだけど……。さっきのでちよつと恥ずかしさも吹っ飛んだみたいだからさ。その……変な声出すかもしれないけど、気にしないで……な？」

「本当か……？」

その望月の赤面と共に発してくれた言葉は、俺にとって最高の「褒美だ。喜びで舞い上がると共に、これからの行為でそんな声を聴くことができる

と思うと興奮——したところで踏みとどまろうと思ったが、遅かった。

「……あのさあ……！」

「……すまん」

そこには先ほどよりも若干スケールダウンしたものの、しっかりと息子が雄々しくそびえ立っていた。それを見て、望月は呆れたようにため息をつき、そして笑う。

「しょうがねーなあ……。追加夜戦……する？」

「……喜んで」

# 文月と朝から夜戦!

「ん……んう……」

うっちー

カーテンから漏れ出るお日様の光と、重くのしかかる温かいお布団が、今日もあたしに一日の始まりを告げる。時刻は七時で、いつもなら鎮守府中の艦娘がお仕事を始めたり訓練を始めている時間。けれども、今日は静か。そう、今日はお休みの日。

「……ふふっ」

あたしの隣で寝てるしれくかん。いつもは早起きしてお仕事を頑張ってるから、しれくかんの寝顔なんて滅多に見れないんだけど、今日は特別。あたしがしれくかんの寝顔を独占できる日、なんだか幸せ。

せっかくの休日とはいえ、何をするかなんて全然考えてない。いつもお仕事が忙しいから、お休みのことなんてあんまり考えられなくて。でもそうだな。しれくかんとたくさん楽しいことが出来たらいいな……♪  
「ね? しれくかん……♪」

幸せそうに寝てるしれくかんの頬を、っん。やっぱちよつと触った、らいじや起きそうにないけど、こんなに無防備な姿を見せられちゃった、何だか悪戯したくなっちゃう。ちよつとくらいなら、いいよね?

しれくかんの上に、重なるように乗っちゃう。しれくかんの身体大きいから、あたしが乗っても全然余っちゃう。

「おじやまします……ん♪」

そつと、しれくかんにキス。こういうドキドキすること、やってみたかったんだ……♪ しれくかんは男の子だけど、何だか眠り姫みたいだね。  
「ん……っ?」

「あ、起きた? おはよ、しれくかん♪」

普段はしれくかんもきっちりしてるけど、さすがに寝起きの顔はちよつとだらしのないの。でもそのいつもと違う感じが可愛くて、見ていて何だか楽しい。

「文月……何で俺の上に?」

「えへへ、しれくかんの寝顔が可愛かったから♪」  
「へえ……?」

しれくかんがいやらしい笑い方してる。こういう時って大体何かえっちなこと考えてるんだよね。顔に出てるもん。

「しれくかん、なに考えてるのよ?」

「ん? だって文月の方から俺に抱きついてくれてるし、これはもう期待に應えるしかないと思って」

「む、期待って……んぐっ!?」

し、しれくかんのキス……! 強引で、激しくて、これじゃあしれくかんのされるがままだよ……でも、嫌じゃない。しれくかんの舌が入ってくる。激しいのに、優しく、このまま全部しれくかんに任せちゃう……  
「えあ、ひれえ……ひや……んむ!」

頭の中が、真っ白になっていく。しれくかんの舌が絡まるたびに、どんな体中が気持ちいいのでいっぱいになって、ちよつと触られるだけで、びくってなっちゃう。

「……文月、すごい顔してる」

「ふあ……だ、だって、しれくかんが、ふあああうあうあ……」

「もう言葉にもなっていないな」

もう自分が何を言おうとしてるのかも、分かんない。体に力が入らなくて、しれくかんにぎゅってされたまま、何にもできない。

「な、文月」

「ふえ……っ?」

「今日は休日だろ。せっかくだし、目一杯気持ちいいことしようか」

今みたいに気持ちいいことを、ずつと……? しれくかんとえっちなことをするのは好き。カッコカリでもあたしはしれくかんのお嫁さんだし、あたしだってそういうことしたい。ただ、今日のしれくかん、いつもより元気だから……

「あたしの身体、もつかなあ……っ?」

「そこは文月の本領発揮だな」

「ふふ、どきどきしちゃうね……♪」

「ここですの……?」

「嫌だった?」

「ううん、ちよつと怖いけど、すごく興奮してる!」

いつもお仕事をするために使っている執務室。そんなところに、パジャマも着替えずにあたしたちは座っている。いつもみたいに椅子に座るしれくかんと、そのお膝の上にあたし。

ドアには鍵が掛かっているから、いつどの艦娘が入ってきてもおかしくないけれど、それがスリルになつてもうどきどきしてる。

「しれくかん、ちゅーして……♥」

何だかしれくかんとキスしていると体中の力が抜けちゃって、あたしのすべてがしれくかんのものになつちゃう。あたしの身体が、しれくかんを受け入れちゃってる。

「ん……しれくかんって、おっぱい好きだよね……♪」

しれくかんの手が、あたしのおっぱいを優しく撫でる。あんまり大きくないから恥ずかしいんだけど、しれくかんは優しく触ってくれる。あたしの気持ち良いところを、全部知ってくれてる。

「」

「ん……文月、もう我慢できなくなった?」

「そ、そんなこと……」

「でもここ、一人でずつと弄ってる」

あたしの右手を、しれくかんが掴む。ほんとにキスしてる間に身体がずつと疼いて仕方なくて、いつの間にかおなにしちゃう。あたしの右手はもうぬるぬるでいっぱいになつてた。

「だって、しれくかんが意地悪するんだもん……♪」

「意地悪なんてしてないよ」

「してるよ、いつもより触り方がえつちで、あたしずーっと焦らされてる」

「じゃあ、もうしちゃう?」

ずつとえつちしたいって思ってるのに、いざこう言われると緊張しちゃう

つて、しれくかんの顔を見るのも恥ずかしい。

「……うん」

「よく言えました」

「ひゃあつ!?」

あたしの身体が、ひよいて持ち上げられる。急にそんなことされたら、びっくりしちゃうじゃないの〜!

「挿れるよ」

「あ、その……うん、えつと……」

あたし、今からしれくかんとせつくすするんだ。もうすつごく胸がどきどきしちゃうって、恥ずかしくて顔があつい。多分、今真っ赤になつてんだよね。心の準備も出来てないから、ほんとにちよつと待つてほしいんだけど……

「……優しくしてね」

あたしの身体は、それ以上に早くせつくすしたくて限界だった。

「はっ……ん、くっ……ううう!」

しれくかんのおっきいのが、あたしの膣内に入って……!

「……大丈夫か? 文月」

「はあっ……はあっ……ちよつと、待つて……?」

やっぱりしれくかんの身体、おっきいから……ん、あたしの、身体じゃ……あうつ、ちよつと、やばいかも……!

「待たない」

「ふえつ、つあ!?」

ちよつと、しれくかん……いきなり動かないですよ! 今、変な声出ちゃつた……外に聞こえてないよね……?

「ほら、口隠さないの。気持ちいいならいっぱい声出していいんだよ」

「んっ、そんなのっ、できないっ! ば、ばれちゃうからあ……っ!」

しれくかんに口元を隠していた両手を抑えられて、あたしの声が、息が、執務室に響く。恥ずかしくて、泣きそうになつて、それでもしれくかんはケモノみたいにあたしを犯してる。

「誰もいないんだから誰にもばれないよ。ドアの前まで行つてみる?」

「待つて！ それだけは……ひううっ!？」

あたしが何と言おうと、お構いなし。しれくかんはおちんちんが挿入したままのあたしを軽々と持ち上げて、両手を扉にあてがわせた。

「じゃあ続き、しようか」

「しれくかんの、きちくっ!」

嬉しそうな顔をするしれくかんに、必死の抵抗。のつもりだったんだけど……

「お、そんなこと言うのはこの口かな？」  
逆効果……だったみたい。

しれくかんの指が、あたしの口の中に入ってくる。

「ひやう……」

「文月は口の中も弱かったよな」

「うう……あう……」

口のなかも、おっぱいも、あそこも全部、しれくかんでいっぱいになって。もうしれくかんのことしか考えられなくなっちゃってる。

「ひ、ひれくひやん……」

「んっ」

「もう、ずっと気持ちいいの……気持ちいいから……あたしを、イかせてえ……」

「っ」

きたっ、きたあつ! しれくかんのおちんちんが、あたしの膣内に、いっぱい、いっぱいきたあつ……!

「しれえ、かんっ……んくっ、もっど、もっどしてえっ!」

しれくかんに、えっちなとこ全部触られて、身体中全部気持ちよくなつて……もうそれだけで幸せで……っ

「おっぱいも、あそこも、もっど触っていいからっ! しれくかんの、したいこと、いっぱいしていいんだよっ……! 激しくていいから、もっどもっど、気持ちいいことして……」

もう何も考えられない。気持ちいいのが欲しい! しれくかんが欲しい! 全部全部、あたしの中に欲しいの!

「んっ、あうっ、んあつ、ひううっ!」

気持ちいいのがくる……この感じ、だめ……きちやう……っ!

「しれくかん……!」

「文月……!」  
執務室の中で、裸で、しれくかんに犯されて、あたし、あたしいっ、イッちゃ……!

コツン……コツン……

『島風——! 島風、どこにいるの?』

コツン……コツン……

『ん、なかなか見つかりませんねえ』

『そもそも鎮守府なんてだだっ広い場所でかくれんぼなんて、探すのが面倒くさいったらありやいないわ。雪風、手分けしましょ』

『了解です!』

「はっ……はっ……!」

今の声……天津風ちゃんと、雪風ちゃんの声だ……! 扉のすぐ向こうに、いる……!

「続けるよ、文月」

「っ!?! し、しれくか……!」

何考えてるのよお! そんなことしたら、いくら静かになっても音が聞こえちゃうに決まってる……!

『んく……やつぱり隠れるなら執務室、ですかね?』

「はあっ……はあっ……」

お願い、聞こえないで……! んっ、しれくかんの、おちんちんの音、聞こえないでえっ……! 声も、我慢するからっ、雪風ちゃんに、聞こえないで……!

「静かにね、文月」

「は、んっ……うんっ……!」

お願い……! 早くあっち行つて……! じゃないと、イツちやいそうなの……声も我慢できなくなつちやう、それに……

「しれくかん……っ!」

「しーっ」

「違うの、あたし、あたしいっ……」

『今日はお休みだから、しれえもいませんよね……なら、勝手に入つても怒られないでしょうか……』

「おしっこ、漏れちやいそう……っ!」

気持ちよくて、イキそうになつて、ずつとおしっこしたかったの……! まさか、こんな時に雪風ちゃんと天津風ちゃんが来ると思わなくて……我慢できなくなつちやうかも……!

コツン……コツン……

『しーまかーぜさーん』

コツン……コツン……

待つて……お願い、あたしもう力が入らなくて……っ! 扉開けられたらばれちやうっ……! 恥ずかしいの、全部見られちやうっ……

トン、トン。

『雪風です。しれえ、失礼しまーす!』

待つて――

『雪風――、執務室は勝手に入らないってルールだったでしょー? 後で怒られても知らないわよー?』

『ああつ、そうでした! 雪風、もう一度下の階を探してきます!』

『ん。じゃあ私は外を探してみるわ』

コツン……コツン……

「はあっ……はあっ……行つ、た……?」

足音が、聞こえなくなった。一時はどうなることかと思つたけど、これで安心してトイレに……

「ひうっ……!? し、しれくかん……?」

「危なかつたね」

「び、びっくりしたあ……ば、ばれちやうかと思つたよお……」

「でも、もういなくなつたし、これで気にせずできるね」

「え、ちよ、ちよつと待つて、待つてつてばあつ……! おしっこ! おしっこ漏れちやうからあつ……!」

しれくかんの、変態っ……! トイレに行かせてくれないんだ……このまま、あたしにおもらしさせる気なんだ……

「文月の恥ずかしいところ、全部見たいな」

「もう、知らないからあつ! しれくかんの、ばかつ!」

「ほら、力抜いて」

「くくっ! 気持ちいいの、きちやうつ! 力抜いたら、漏れちやうつ!

でも、でも、気持ちいいのっ! もう、何も考えられなくなつちやう!

おしっこ、我慢してたけど、もう、何が何だかわかんなくなつちやう……ただ気持ちよくて……もう、もうっ……

「だめっ、しれくかん、イツちやう! イツちやう!」

「俺も……くっ、射精る!」

「く、ひうっ……ああああああああつ!」

しれくかんの、せーえきがっ……臆内に、出て……!

だめ、気持ちいいのが、頭の中に、ぜんぶ、ぜんぶきもちよくて……なにも……わかんなく……

「ふああ……おしっこ、漏れちやうつ……あ……」

おしっこ、気持ちいいよお……ああ、執務室のお外まで広がって……

「はあ……はあ……文月……」

「し、しれくか……ん……」

「……寝ちやつたか、ふふっ」

……

……

……あれ？

「あたし、何して……」

あたし、何してたんだっけ。お布団の上で起きたってことは、今は朝？いや、そんなことないよ！だってあたしはさっきまでしれくかんと……  
「あ、文月、よく眠れた？」

起き上がると、しれくかんが隣から優しく頭を撫でてくれた。

「ごめんねしれくかん！あたし、寝ちやつて……」

「いいんだよ。ちよつと片づけは大変だったけどね」

「片付け……あ」

そうだ、あたし、おもらししちゃって……

「でもあれは、しれくかんのせいじゃないの〜！」

「ばれたか」

「む〜」

「はは……それで、これからどうする？ 疲れただろうし、もうひと眠りするかい？」

今日は一日お休みで、まだまだ時間は沢山ある。やりたいことは沢山あるけれど、あたしは……

「ううん、それより……」

「お布団の中でもう一回、しよ〜」

あたしはすっかり、しれくかんとのおえつちにハマっちゃったみたい。

睦月型えっち合同誌主催・企画  
めんていやくなのあとがき

睦月型えっち合同誌を読んで下さりありがとうございます。  
主催や編集や表紙絵やマンガもしました。めんていやくなです。

この合同誌を企画したのにも理由がありまして。  
睦月型の成人向け合同誌と、睦月型だけでもコアだと思うんですが  
艦これの同人イベントで成人向けの睦月型エロ本って  
なかなか出ないんですよ。(睦月型は逆に一般向け本が多かったり。)

自身でも皐月ちゃん本を出したのですが、ある日  
『睦月型が好きな絵描きさんの規模であれば合同誌で収まるかも』と  
とっさに思いつきました。

睦月型って「1人と恋愛」というよりは「睦月型で家族」ってイメージが強いんです。  
でも、それでも！睦月型のえっちが見たい！という高ぶりで  
急遽、企画を立てて、募集して46人の参加者を集うことが出来ました。

参加していただいた作家さん46名の方々、本当にありがとうございます。  
皆さんの原稿をみながらハスハスしてました。  
純愛H・おしおきH・百合、ギャグや小説も、編集しながら楽しませて貰いました。

睦月型という子たちのえっち合同誌が出来たことに  
私自身、とても満足しています。

今年は11人目の睦月型、水無月ちゃん実装されましたし  
12人目の夕月ちゃんくるのをが楽しみです。その時は…それでは。

世に睦月型のあらんことを。 めんていやくな

■睦月型えっち合同誌の参加作家様(掲載順)

ユメのオワリ・いまち・黒咲まんぼう・文釣遠瑠・えりある・ひほり・禱  
ひなつきましろ・ふれあ・すか・mou S・us・しはちろ・めんていやくな  
ロリコントラップ・いそぼ・大阪屋うろ・雨美すずめ・あとのまつり  
六日・白端みずち・たーごいる・おちよん・豚たまこ・楓蛙  
熊灯ツムギ・マンガをうpする人・マルム・柴犬きせつ  
カイチョー・ぎよん・鈴鷹美樹・ラムネ・キンニク  
すずかぜそら・Alt+4・ミュウ・有葉米太・寺田・白狼姫  
ステルス・azumaya・NUUNO・萩鷺・モフースキー  
ふらふらっぐ・うっちー

ご参加いただきありがとうございます！



## 奥付

『睦月型えっち合同誌』

発行日：2016年12月29日(コミックマーケット91)

発行者：めんていやくな(mail:mentei897@gmail.com twitter:mentei897)

印刷：プリペラ印刷様 タイトル筆字：やま先生(twitter:komaguchi)

この本の未成年の閲覧や購買禁止。違法アップロードサイトへの無断転載禁止。



■参加者

めんていやくな

ユメのオワリ

いまち

すか

柴犬きせつ

US

しはちろ

えりある

黒咲まんぼう

文釣遠瑠

ひほり

禱

ひなつきましろ

ふれあ

mou S

ロリコントラップ

いそぼ

大阪屋うろ

雨美すずめ

あとのまつり

六日

白端みずち

たーごいる

おちょん

豚たまこ

楓蛙

熊灯ツムギ

マンガをうpする人

マルム

カイチョー

ぎよん

鈴鷹美樹

ラムネ

キンニク

すずかぜそら

Alt+4

ミュウ

有葉米太

寺田

白狼姫

ステルス

azumaya

NUUNO

萩鷺

モフースキー

ふらふらっぐ

うっちー

